

四、器械蒔 は、幅四尺に五六寸の臺附の者であるが、一寸五分四方或は、二寸四方に、穴を穿ちたる者で、箒を以て穴の中へ粃を掃き込み、少し木片を押せば、粃は下床に落る者で、苗床の正條植が出来るのである。二寸四方に、三四粒の粃が落ちるとせば、一坪には、一合蒔以下になるのである。又た近來西川副村に於て流行する方法は、一寸板の両面に、一寸隔に杭を植ゑたる者にて、苗床面に捺印し、其四印の所に、粃を一粒宛蒔き、其上に泥を塗り付け、粃の動かない様にするのである。夫で、播種量は、一坪に三千六百粒となるのである。

#### 第八節 播種量

播種量を定むるには、基礎を確定せねばならぬ。粃は浸粃か干粃かと云へば、浸粃である。而して苗床に於て、樹を以て計るのである。夫故に、播種の際は、必ず樹と九尺竿は是非とも持て居らねばならぬ。而して、九尺竿にて印を付け、一坪毎に蒔付るのである。或は此の一畦が何坪、何合あるかを計算し、一畦宛粃を計りて、蒔付ても宜しいのである。

害虫の爲に、播種量の多かりし佐賀縣も、大分播種量が減じた。坪一升が八合となり、七合となり、五合となり、四合となり、三合となつたのである。本縣知事は、坪三合以下にせよと、告諭せられたのである。農業家たる者、知事閣下、告諭の眞意のある所を服膺して、薄蒔を勵行せねばならぬ。此の告諭の遵守の出來ない位の部落は、二三年は、他村より後れ居る所だから、五石懸賞等は、思ひも寄らないのである。所が三合蒔と云へば、大分薄い様だが、三合蒔では、未だ五石懸賞に、合格は六ヶ敷のである。五石懸賞に、合格する苗としては、坪二合五勺を蒔て、二合位に、間引したる者でなければならぬ。

#### 第九節 完全なる苗

完全なる苗と云つても程度がないので、二合蒔の苗もある、一合蒔の苗もある、五勺蒔の苗もあるが、終に、苗床に於て、一回移植するのである。之は、苗の一寸五分位に延びたとき、移植するのであるが、健康なる苗が出来るのである。而し成長は何程か遅るゝのである。

第十節 薄蒔苗の經濟上の利益

蒔量も少いから、籾種子が少く入る譯で、又た夫が爲に、強健なる苗が出来て、收量が多くなる、今薄蒔の爲に、一段歩より、籾種子三升を減ずるときは、

薄蒔の利益	一村	五百町歩	百五十石	千五百圓
佐賀郡		一萬町歩	三千石	三萬圓
佐賀縣		五萬町歩	一萬五千石	十五萬圓

一村で、千五百圓、佐賀郡では三萬圓、佐賀縣では十五萬圓の利益であるが、實際は、夫れ以上の利益である、一昨年、三十五戸ある、下武部落では、共同苗代をなし、品種の一定、薄蒔の一定をなしたから、籾種子、代金而已にて、百六十圓儲かつたと言つて居るのである、夫れ而已ならず、收穫が多くあつたのである。

第十一節 苗代の管理

苗代に、播種し、灌水したならば、大體上、深水を湛へて、置くのである、然するときは、三四日の内には、發芽する者である、發芽後は、已を得ず、夜中水を落して、

晝灌水するのである、而して、時々、灰を散布するのである、灰を散布したならば、漫に水を落してはならぬ、之は、病毒を豫防するの効があるからだ而して可成、晝は浅水を掛けて置かねばならぬ、二十日許りを経ば、溝苗を引くこと、雜草及稗を取ることに、二回位苗の間引をすること等が、必要である。

元來、踏切溝なる者は、伊達に拵へたる者ではない、雜草や、稗を除き、且苗の間引をなす爲である、所が、稻と云ふ言葉は、如何なる所より來りし者なるかと云ふに、命の根と云ふ所より來りしこと、思ふ、實に、農業家而已ならず、國民全體の命の根である、所が大根一本植ゑても間引する、粟を植ゑても間引する、のに、大切なる命の根なる、稻に、至ては、間引もせないと、前後矛盾も甚だしいではないか、況んや、除草もせないと、實にあきれ果てたる次第と云はねばならぬ。

第十二節 稻苗の種類

稻苗も調べて見れば、種々ある、即ち、分蘖苗、莖蒲苗、綠苗、端苗、稜角苗、丸苗、中

苗、線香苗、素麴苗、髮毛苗、等であるが、併しこれを分類すると、

- 一、分蘖苗
- 二、稜角苗 Ⅱ 菖蒲苗、線苗、端苗
- 三、丸苗 Ⅱ 中苗、素麴苗、線香苗、髮毛苗

となるのである。

一、分蘖苗 は、苗床に於て、二三本より十本位に分蘖し居る者であるが、既に、苗床に於て、分蘖し居る位だから、將來の子分、株張の宜しきことは、判り切つた事だから、上等の苗とせねばならぬ、而已ならず、肥料を吸収する力が強いのである、此の子分に、必要なる肥料は、何であるかと云へば、窒素肥料である、薄蒔で、窒素肥料が多ければ、株張は能くなる者である、加里肥料は、株張を制限する傾がある、其の代りに、苗が丈夫に出来るのである。

二、稜角苗 は、稜のある様に、苗の出来たる者である、菖蒲苗、線苗、端苗等であるが、斯の如く、苗に稜が付て居れば、分蘖するの間に間違はないのである、尙、肥

料吸収力が強い苗である、理想的に云へば、分蘖し居らずとも、稜角苗になりてさへ居れば、夫で宜しいのである、全部が、稜角苗になる様に拵へるには、何うしても、先走りは、數本に子分し居る様に作らねばならぬ、夫れだから、苗床では、稜角苗に出来て、子分せない様に拵へるが、苗仕立の上手と云ふべきである。

三、丸苗 は、中苗、髮毛苗、線香苗、素麴苗、等であるが、苗中の最下等の苗で、分蘖力は弱く、且つ肥料を吸収する力が弱いから、劣等の苗として廢棄すべきである、斯の如き苗を、拵へる人、斯の如き苗を植ゑる農家は、米を採ることを、好かない人、としか思へないのである。

### 第十三節 薄蒔苗の特長

薄蒔苗の特種なる點及び注意すべき點を擧ぐれば、左の通りである。

- 一、丈短く廻り大なること
- 二、肥料の吸収力強きこと

三、莖稈頑強なること

四、分蘖力強きこと

五、穂揃宜しきこと

七、熟期早きこと

七、穂丈け長く且粒數多きこと

八、肥料を多く要すること

等であるが、今少しく説明して見よう。

一、丈け短く廻り大なること 苗は、如何なる者が宜しきやと云ふに、丈けが

短くて、廻りの大なる程上等の苗である、廻りが太ければ、太き程收量が多く、

廻りが細ければ、細き程收量が少いのである、約言すれば、稲の收量は、苗の横

徑の大小に比例すと云うても宜しいのである。

二、肥料の吸収力強きこと 厚蒔苗なる髪毛苗は、纖弱なる苗で、従て肥料を

吸収する力が弱い、薄蒔苗の短大なる苗は、強健なる苗で、従て、肥料を吸収す

る力が強いのである、然るに、同じ種子を同じ土地に蒔て、唯だ苗の廻りの大小に依りて、肥料を吸収する力の異なるやと、一寸疑念を起す者もあれ共、此事たるや、恰も人間の兒童も同じ事である、兒童でも坊様育ちと、風の子育ちと、何れが強壯なるや、何れか食物を多く喰べるやと云ふに、風の子育ちの方が、身體が強く且つ食物も多く喰べるのである、坊様育ちであれば、食慾が弱いから、例へ餅の御馳走に遇ても、腹が痛むとか、團子の御馳走に遇ても、下痢すると云ふ工合で、多く喰べれば、反て食物に當てられて、身體を害することがある、風の子育ちになると、食慾が強いから、團子や餅の御馳走に遇ても、有り難く頂戴致す譯で、饅頭、蕎麥、素麵、尙更ら結構だと、舌鼓を鳴らす位である、夫で、泌々著者も感じた事がある、小兒を育てるには、溺死せざる限り、夏は、半ば位は水泳ぎで、暮させて置くことは、身體の強健になる爲に、一世涯中何れ丈の得であるかも知れぬと思つた、著者は、暖地に育つた者であるが、寒地に育つた人と、暖地に育つた人と、何れが、寒氣に抵抗する力が強きかと、實驗し

た結果、暖地に生れた者が、反て寒気に抵抗する力が強いのであるといふことが分つた。寒地の者は寒い寒いと言つて、身體を外氣に曝す機會が少ないが、暖地に生れたる者は、身體を外氣に曝す機會が多いのである。例へば、寒地では水泳の日數も少なく、且つ一日中の水泳時間も少ないのである。夫で寒地の者が、皮膚を外氣に曝す機會の少きことは、察せらるゝ次第である。著者の育ちたる頃は、夏は暑ければ、水中に飛び込む、而して、口唇の紫色を帯びる位まで、泳で居る。川より揚りて、暖かき砂塗りをやる。或は、焼たる石燈籠に抱き付くと云ふ。工合で、夫等の御陰で、身體が頑強である。夫と同じ事、稲苗も、仕立方一つで、強くもなれば、弱くもなることは、察せらるゝ次第である。

三、莖稈頑健なること。厚蒔苗は、日光の透射を妨げ、且空氣の流通を阻害されて、皮膚を日光や外氣に曝すことが出来ないから、苗の皮膚が軟弱になり易いに、薄蒔苗は、皮膚を能く外氣に曝すのであるから、従て苗が強健に出來、病害や水害に侵かざるゝことが少い譯である。殊に水害地の如きは、著しき

效驗があるから、特に、薄蒔苗の必要があるのである。

四、分蘖力強きこと。薄蒔苗は、子分をする力が強いから、一株の本數多く、一坪の總本數も多く、従て收量多き譯である。

五、穂揃宜しきこと。薄蒔苗は、子分が早く始まるが、従て子分が又た早く止まるから、従て、穂揃が宜しい譯である。之に反して、厚蒔苗は、ダラリ、ダラリ、株張するから、後れ穂が出來て、不揃となる譯である。

六、熟期早きこと。薄蒔苗は、稻の生育が餘程早いのである。従て、成熟も四五日間位は、早くなることがあるから、秋冷の害を免るゝことを得る代りに、雀の害があるから、注意せねばならぬ。

七、穂丈は長く、且粒數多きこと。薄蒔苗は、生育が強いから、大なる長き穂が出來、従て、一穂の粒數多き故、收量も従て多き譯である。

八、肥料を多く要すること。薄蒔をすれば、肥料を少く、厚蒔をすれば、肥料を多くせざばなるまいと思ふが、之は、全く反對で、薄蒔には多く肥料を施さね

ば、苗が伸びないのである、厚蒔であれば、肥料を少くして伸びるのは、横には張り出すことが出来ないから、太陽の光りでも、拜む心持で互に競争して伸びる譯である、夫で、厚蒔に多くの肥料を施し、薄蒔に少なく肥料を施すなれば、順當である、夫で、厚蒔に少く、肥料を施して宜しいと云ふことになれば、従來の苗造り方は、誤つて居たと云はねばならぬ。

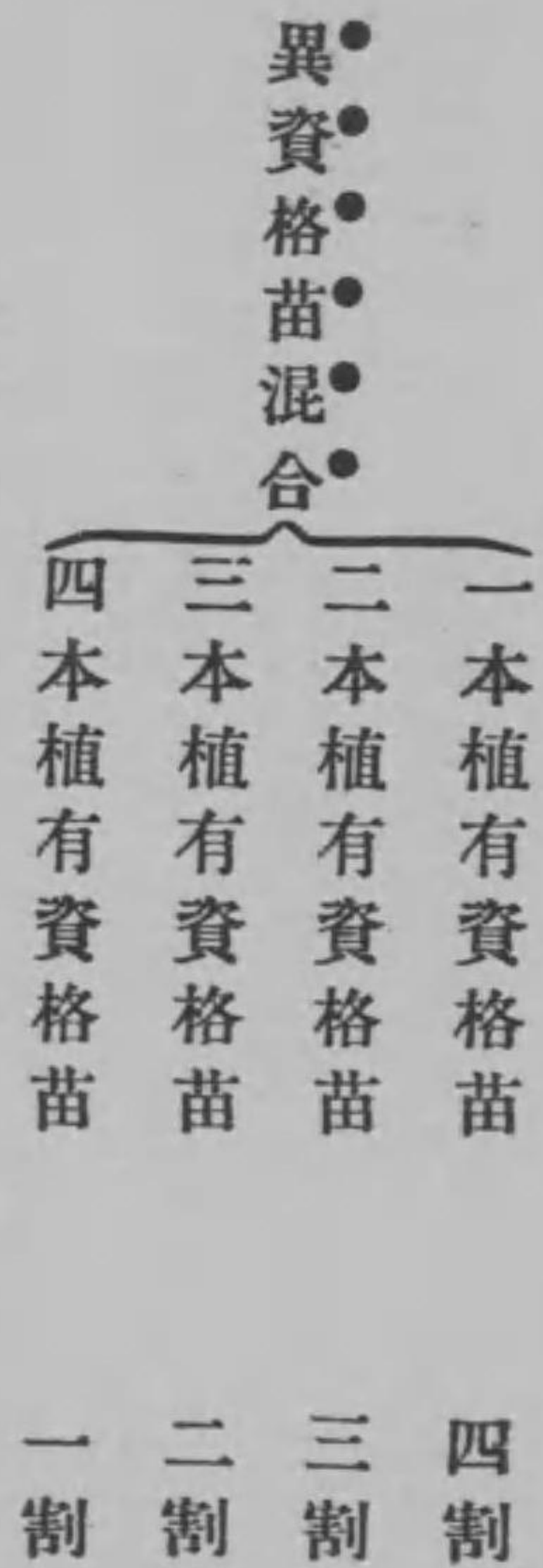
第十四節 稲苗の資格

稲苗には、大なる者と、小なる者がある、其大小によりて、苗の資格を定めねばならぬ、其資格によりて、一株の本数が定まるのである。

苗の大小は、播種量の多少に依りて異なる者であるが、亦た一枚の内にも、内部と外部とに依りて、異なる者である。

一、苗代一枚中に、異資格苗の混合 苗代一枚の中でも、外部の苗は太くして、内部の苗は細い、亦た内部の苗にても、間引したる苗、移植したる苗、なれば、大小の不揃が少けれども、間引せない苗、移植せない苗は、勢ひ不揃であるから、

従て異資格苗が混合して居る譯である、例へば、苗代一枚中に、一本植の資格



ある者が、四割とか、二本植の資格ある者が三割とか、三本植が二割とか、四本植が一割とか云ふ如く、異種が混合して居る、其異種苗を、挿秧のときに、混植するから、出穂に早晚ありて、見苦しき事があるのである。

第十五節 播種量と一株の本数との關係

播種量は少なければ、少き程、苗が丈夫に出来るから、一株の本数を少くし、播種量が多ければ、多き程、苗が繊弱に出来るから、一株の本数を多くせねばならぬ、例へば、一合蒔なれば、一本植、二合蒔なれば、二本植、五合蒔なれば、五本植、

八合蒔なれば八本植、一升蒔なれば十本植、一升五合蒔なれば十五本植、と云

播種量と一株の本数との關係

蒔本	蒔本	蒔本	蒔本	蒔本	蒔本	蒔本	蒔本	蒔本	蒔本
量	量	量	量	量	量	量	量	量	量
九	一	二	三	四	五	六	七	八	九
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
十	一	二	三	四	五	六	七	八	九
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
十	一	二	三	四	五	六	七	八	九
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
十	一	二	三	四	五	六	七	八	九
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
十	一	二	三	四	五	六	七	八	九
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本

ふ如き者であるが斯の如く、整然と行くべき者では、無いけれども、詮ずる所、播種量が少ければ、一株の本数を少く植ゑて宜しいのである。

第十六節 一株の本数と、未出穂稻との關係

一株の本数が多ければ多き程、未出穂稻は多く、少なければ少き程、未出穂稻は少ないのである。夫等の實例は、活苗をなす場合に、活苗の出穂數少きに依りても、明かである。

未出穂稻は、肥料而已吸收して、穂を出さない者で、實に、道樂息子と同じ者で、

一株の本数と未出穂稻との關係

一株の本数	一株の本数	一株の本数	一株の本数	一株の本数	一株の本数	一株の本数	一株の本数	一株の本数	一株の本数
盛時の本数	盛時の本数	盛時の本数	盛時の本数	盛時の本数	盛時の本数	盛時の本数	盛時の本数	盛時の本数	盛時の本数
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本

大に損な者である例へば、一本植をなせば、盛り時は十四本になりて、十二本穂を出し、未出穂の者は、二本である、五本植では、盛り時は二十本で、出穂數十四本で、未出穂數は六本である、十本を植ゆれば、盛り時は二十五本で、十四本の穂を出して、十一本の未出穂となるのである、夫れで薄蒔苗は先き先き迄、宜しく、厚蒔苗は、後ち後ち迄、悪しく、肥料經濟の上に於ても、大に、損失であるから、薄蒔苗を拵へねばならぬ。

第五章 佐賀郡の稲作上、特種の耕種組織

特種の耕種組織とは、佐賀郡に特有なる、稲作上の耕種組織であつて、他府縣に見ない而已ならず、他府縣の農業家が、如何に逆立しても、真似の出來ない組織である、今左に條項を掲ぐれば、

- 一、春田を(休閒田)置き、中稻、晚稻の輪作をなすこと。
  - 二、堀の水を、稻田の灌漑用水となすこと。
  - 三、堀を浚へて、塵泥土を肥料となすこと。
  - 四、右三項は本縣稲作の多收穫に與りて力あること。
- 等であるが、順次、説明を加へて見やう。

### 第一節 春田クネダを置き、中稻及晚稻の輪作をなすこと。

佐賀郡は、農家人口に對し、田地の多き所で、一戸平均、田地段別は、一町歩餘に當り、壯健なる雇人、一人の負擔は、一町五段歩なりしが、近頃は、一町六段歩にも増して居る、又た一戸にて、八九町位耕作して居る、農業家もある、盛なりと云ふべしである、夫で田地段別の半分は、中稻半分は、晚稻を植付るのである、

晚稻の跡地は、春田となし、休閒し、翌年中稻を植付るのである、此の中稻、晚稻の期節上の區域は、嚴然として、三十日間の差がある、海岸且平坦部にして、斯く期節上の區域、嚴然たるは、他縣に見受けざる所である、然るに、此の輪作組織は、利害得失の伴ふものであつて、利とする所は、

- 一、收量多きこと、二、勞力の平均を得ることにあるのだが、其收量多き原因は
- 一、休閒田となし置くこと、二、中稻、晚稻の隔年輪作をなすこと、三、二種作なる故に、何れか凶作を免るゝことであるが、害とする所は、害蟲の本場となるのである、即ち、初夏より晩秋まで、稻草存在し居るを以て、二化螟蟲も、三化螟蟲も、食糧に不足はせず、繁殖盛んである、夫れ故に一種作になす時は、螟蟲の被害は、絶滅は出來ずとも、半分に減ぜらるゝ者であることは、慥かである、然るに、一種作になすことに、躊躇することは、一、一時に二倍の用水を施用する者なれば、用水の不足は來さざるや、二、一時に二倍の勞力を要するを以て、勞力の不足は來さざるや、にあるものだが、社會の變遷、殊に經濟界の變遷の爲に、



漸次、休閒田を廢し、全部二毛作地に爲さざるべからざる、大機運が來る譯である、今其理由を述べて見よう。

### 第一項 佐賀郡春田<sup>クナタ</sup>問題の解決

佐賀郡には、田地段別、一萬餘町歩ある内、五千町歩は、隔年休閒地となすのであるが、此の五千町歩に、二毛作をなし、麥を植付れば、佐賀人は米を常食とし、麥を用ゐること少し、段當り、二十圓の收入ありとしても、百萬圓の收入が上るのである、此の百萬圓の遺利は他府縣には無い、佐賀郡への天祐である、佐賀郡民たる者、天地に向つて感謝すべきである、此の百萬圓を、人口増加する迄、捨て、置くか、奮勵努力、今直ちに、拾ふかであるが、古より天の與ふる者を取らざる者は、天罰が當ると云つて居るから、成るべく速に拾ひ取る必要があらう、然るに佐賀郡の農家も、年々増加するので、現今の農家の人口四萬七千人、而して、一年の増加は、六百十一人である、所が本郡の全收入は八百萬圓であるから、其内農業家の收入は、五百七十七萬七千圓である、一人平均は、百

二十二圓九十錢となるのである、併し人口が増加しても、一人當りの收入を、減額せざる様にするには、差當り、一毛作地を二毛作地にするには、大に必要なること、思ふ、夫で、休閒田の收入、百萬圓を一人當り收入、百二十二圓九十錢にて割れば、八千百三十六人となる、即ち八千百三十六人迄は、増加しても、差支ないのである、八千百三十六人の増加は、何年か、るやと云ふに、十三ヶ年半を要するのであるから、金錢經濟上よりして、十三ヶ年半の内に、全部二毛作となし、麥作をなすの必要がある、然らざれば、漸次一人當りの收入は、減少する譯となるのである。

今又た勞力經濟上から調査して見れば、佐賀郡は、田畑計、一萬二千四百町歩であるが、一毛作、二毛作もあるから、累計耕作段別は、一萬九千八百町歩である、然るに、一人の耕作段別は如何と云ふに、四段二畝となるのである、將來とても、一人當り段別は、減ぜない様にせねばならぬ、夫で、春田五千町歩を二毛作にする必要がある、五千町歩を、一人の耕作段別、四段二畝にて割れば、一萬

千九百人分あるのである、一年の増加人員六百十一人にて割れば、十九年半となるのである、夫で、十九年半の内に全部、二毛田と爲さざれば、一人當りの耕作段別は、減少する譯である。

右の如く、本郡産業状態を、金錢經濟上から見れば、十三ヶ年半となり、勞力經濟上から見れば、十九年半となり平均十六年半となるのである、夫で、十六ヶ年半迄は、生計上異状なしと云ふことになる、随分心細い事ではないか、然るに、農業家の子弟も、全部農業を爲さず、且、本郡は、出稼者も多くあるので、在籍人員より、現住者の少き所だから、實際上は、今少しくは、永く現状を維持することが出来るであらう。

### 第二節 堀の水を稻田の灌溉用水とすること

佐賀郡及佐賀市の飲料水、及稻田灌溉用水は、舊藩時代の、成富兵庫と云ふ土木大技師が、川上より、運河を以て分水したる者で、佐賀市内にも、縦横自在に溝渠が疏通して居る、田地には五十間乃至百間位の間隔にて溝渠がある、大

溝渠は、幅十間小溝渠と雖、幅三間位の者で、縦横に貫通して居る、而して、此の堀に貯水せられ、暖められた水が、踏車によりて、稻田に灌溉せらるゝのである、用水充分なるときは、一段の踏車にても、宜いけれども、用水の少くなるに従ひ、二段車となり、三段車となり、大千魃の時の如きは、四段車も使用することがある、灌溉の苦辛察すべきである。

### 一、水中の養分

元來、水なる者は、酸素と水素の混合物であるが、純粹なる水、即ち蒸溜水の如き者では、吾人の滋養にはならないのである、夫で、酸素や水素の外に、養分が含まれて居らねばならぬ、加里や、磷酸が含まれて居らねばならぬ。

熊本の水前寺に行けば、水前寺菜がある、之は、水前寺から、砂取町を経て、江津湖迄の間の、水の湧出する所の、砂礫を掻き集め、其處に、蔬菜の種を蒔き置けば、肥料を與へずとも、自然に成長するのであるが、之は水中に養分を含有し居るからの事である、又た此の流域に育ちたる鯉鮒が特別に美味であるこ

とも、天下に名高いが、之も、水の關係である、亦た江津湖には、藻が生える、春期になれば、毎日三四十隻の船が出で、藻を採つて居る、大根の肥料として、效驗があると言つて居る、併して南部より合流する緑川に生えたる藻は、肥料の效驗が少いからとて、取る者はないのである。

愛媛縣の、南宇和郡の平城には、海岸の埋立地がある、而して、十町歩許りの、悪水溜なる池がある、此の池に育ちたる鰻、鮠、及鮒は、甚だ美味である、鰻も、海より這入りて、四五十日も其池中に住居して居れば、肉軟かく、美味になりて居る、鮠も骨軟かく、鮠も焼けば黄色を帯び、油ぎりて美味である、此の附近にも、池は、二三ヶ所あるけれども、魚類の味ひ悪くして、比較にならぬ、此の池に育ちたる者に限りて、美味なるは、何故であるか、從來、誰も解決する者はなかつた、著者が、水産農業學校長をなし居るとき、其れの調査をなした所、其池に流入する小川がある、其小川に、鰻の籠飼をなし置くに、鰻が瘠せないと云ふことを聞き出した、亦、其小川の水は、酒造家が酒が腐敗せぬと云つて珍重から

れて居ることを聞き出した、此の二つの事實で、全く水中に、養分が含まれて居ることが判つて、漸く解決を付けたことがある。

酒造家が、麴を造る、麴菌は生物である、故に米を上白にすると灰分が不足する故に、蒸米に灰を振ることがある、即ち灰分を補ふためである、又た酒を造るに、酒母は生物である、夫で灰分の必要がある、其灰分を與る爲に灰分を含み居る、水を選ぶ譯である。

### 二、川上川の用水

川上川は、小關松梅の花崗岩地より、流れ出で、居る、従て、河水には、花崗岩特有の磷酸加里が含まれて居る、此の川の水を飲みて、生活する魚類は、美味である、鮎にても、金緑とか、銀緑とか言つて、特に美味であると言つて居る、佐賀市、及佐賀郡の住民は、此の川上川の水を飲んで、生きて居る、鍋島男子の氣骨ある點も、此の水の塊りである、此の水が無くなつても、鍋島男子の氣骨丈は消失してはならぬ、佐賀市には、鑿井に依りて、地下水を取りて、飲料水とする

のだが、川上川の水質には、及ぶまいが、成分表を見れば、加里の含量も上げてある位だから、幸である。

川上川の水は、佐賀市を通りて、漸次下に降りて、稻田の灌漑水となるのであるが、途中に臺灣水蘭が待伏して、水中の養分を吸収するから、其残汁を稲が吸ふ様の有様である。實に、主客轉倒して居るではないか、彼の臺灣水蘭の葉莖は、稲を造る養分で、作つたのである。而して、臺灣水蘭が、吸収せざれば、其れ丈け稲が能く繁茂する譯である。然るに、臺灣水蘭は、第二の故郷を見出したる如く、猛烈な勢を以て、繁殖しつゝあるが、之は是非とも、退治せざれば、佐賀郡の恥辱である。堀中の葭及菰等も、同じ事である。菱に至りては、何程かの收入があるから、慰安が出来る譯である。

要するに、川上川の水は、天然に養分が餘計に含まれて居る。又た佐賀市通過の際も、多少の養分は混入するのである。尙ほ、堀水は、温暖である。此等を總合すれば、佐賀郡の稲作が、能く出来るのも、所以あるかなである。夫で水踏の苦

痛も、差引消失する次第である。

三、肥料の天然給源

肥料には、天然給源と云ふ者がある。夫は、空中より雨水が連れ來り、稲に供給するのと、灌漑水に依りて、稲に供給せらるゝ者とあるが、其分量に付ては、幾内支場では、一ヶ年一段歩で窒素が一貫四百二十二匁、磷酸が一貫二百七十一匁、加里が一貫五百五十一匁と云つて居るが、佐賀郡では、水質も宜しく且、

雨水及灌漑水より來る天然給源	窒素一貫四百二十二匁	一段歩
	磷酸一貫二百七十一匁	一段歩
	加里一貫五百五十一匁	一ヶ年

佐賀市よりの汚水も混合し居る者なれば、佐賀郡の田地一段歩一ヶ年間の

窒素が一貫二匁

天然給源は、磷酸が一貫五百匁

加量が一貫二匁

位は含有し居る事と思ふ、夫は六石懸賞田の肥料の施用量と、稻の收量との比較に依りて察せらるゝのである、窒素二貫匁と云へば、大豆粕二枚分、燐酸一貫五百匁と云へば、過燐酸石灰一俵分、加里二貫匁と云へば、木灰二十貫分の效驗があるのである、以て佐賀地方、農業家の天佑として、天地に感謝の意を表せずばなるまい。

第三節 堀を浚へて、<sup>ゴミツチ</sup>塵泥土を肥料とすること。

第一項 塵泥土の效能

前節に佐賀の田地には、縦横に堀があると云つて居たが、其堀を浚へるのは、十二月より始め、翌年四月迄の内に終るのであるが、堀浚の一團體は、二十四五人位を要するのである、汲上たる塵泥土は、田地の一區劃に集め、充分乾燥せしめ、田地の肥料とするのである、夫故に、周圍に堀の添うて居る所は、賣買價格も、一二割は高價である、今塵泥土の效能を述べれば左の通りである。

一、有機物多量に存在し居ること

二、不溶解の養分多きこと

三、溶解すべき方法如何

(一)蒸氣熱力、(二)燃燒力、(三)日光熱力

塵泥土の效力

四、塵泥土の成分、

五、塵泥土は二倍の效力あること

六、<sup>密</sup>密土法の利益あること

七、<sup>密</sup>密地病を豫防するの效力あること

一、有機物多量に存在し居ること

有機物存在し居ることは、黒色なるを以て明かである、平坦部の土地は、有機物減少し灰色になりつゝあるのである。

二、不溶解の養分多きこと

有機物の物質多く且水底に沈澱し居りたる泥土なれば、其養分は不溶解の者が多いのである、之を可溶解する方は、(一)蒸氣熱力によりて熱するれば不

溶解物も可溶解物になるけれども、入費が嵩んで仕方がない。(二)燃料を以て燃焼するときには、不溶解物も可溶解になるけれども、是亦入費が嵩んで効力が少ないから、(三)日光の熱力を利用して、最も入費が少くして、有効である、即ち適度に切り碎きて、充分日光に乾燥すれば、乾燥する程、可溶解になるのである、或人が、蘆泥土を、日光に乾燥せば、養分が逃げはせぬかと、問ふたが決して、有機的肥料は逃げないのである、例へば、大豆粕、菜種粕、魚肥等の如しである、

三、蘆泥土の成分は、百貫匁中に窒素、二百三十匁、磷酸百六十五匁、加里八十二匁である。

	窒素	〇、二三〇
蘆泥土の成分	磷酸	〇、一六五
	加里	〇、〇八二
四、蘆泥土は二倍の効力あること		

であるが、之は肥料成分上より云へば、十圓方の効力があるのに、實際上は、二十圓方効力があると云ふ意味である、左に其理由を述べるのである。

五、彌地病を豫防するの効力あること

である、一體生物は自分を害する者を自分で吐くのである、人間でも、口より炭酸を吐く、其炭酸を鼻より吸入するときは、害になる、又大便小便をなす其大便、小便を食したならば、害になる、尿毒症の如きは、尿が排泄せられずして、体内を廻つた迄で、直に中毒するのである、植物も、夫と同じ事で、自分を害する者を自分で吐くのである、之が彌地病の起因である、彌地病と云へば、豌豆を一度作れば、八年間は植付は出来ない、茄子を一度作れば、三年間は植付が出来ない、胡麻等も然りである、熱帯植物を、温帯地方に植付る外、連作を好む作物は殆んどない、稻でも、連作は好まないものである、唯強いと云ふ迄である、夫で、蘆泥土を田地に入れば、彌地病の害毒を消すことにもなる、又た害毒を薄めることにもなる實は、

## 六、客土法の利益

であるから、山の土でも宜しければ、畑の土でも宜しい、兎に角、違つた所の土さへ入れてやれば、客土法の効力はあるのである。夫で壘泥土の如き肥沃なる土を入れてやれば、尙更ら結構の事である。

佐賀郡は、水芋の本場である。著者が、小兒のとき聞き居たる事には、佐賀町へ行けば、樋瓦の如き、水芋莖があると、成程、佐賀の水芋莖は大なる者である。所が、水芋には、根莖の腐敗病がある。時々、驅除法の質問を受くるのだが、根本的の驅除は、作土の交換にあるのである。故に、芋田の土を荷ふて、稻田に行き、歸りに、稻田の土を持って来る。斯の如く、行き戻り駄賃で、稻田の土と、芋田の土と交換したならば、芋莖も、能く出来、稲作も、能く出来、譯である。嘉瀬村の高取藤一君は、田土を屋敷内に運び來り、三尺位の高さに積みたる、三畝許りの畑を作りて居る而して、其は、三年間位、蔬菜を作るのである。而して漸次、田に送り出すのである。結局が、宅を出るときには、畑土を運び出し、歸宅のときは、田

土を持ち歸ると云ふことである。而すれば、稻田も能く、出来る譯で、實に客土法の實行者と云はねばならぬ。

## 第六章 本田の整地

一、秋耕冬耕を深くし、夏耕を浅くすること前に述べた如く、佐賀郡は、他縣と異なる所がある。井は春田の多きことである。晩稻の跡は、麥作をなさずして、春田として、休閒し、中稻を植付くるのである。夫で、中稻の跡も、晩稻の跡も、始めに耕耨するときに、出来る丈け、深く耕起せねばならぬ。老農は曰く、だ、深耕せねばならぬと思ふて、三年耕せば、一寸位は深くなるが、之に反して、少し淺掛して、三年耕せば、一寸位は淺くなると、所が、深耕をするのは、秋冬耕のときで、麥跡の夏耕は、少々淺くしても宜しいのである。

二、耕耙は、懇ろにするが宜しい。耕耨するにも、小掛をして、小塊に起さねばならぬ。亦た馬耙を以て、土塊を碎き、且つ坦す上に於ても、大に注意を拂つて懇

ろにせねばならぬ、尙高低の甚しき所は、人力を加へて、坦す位の心掛を要するのである、

三、中鋤を入れるときは、水持ち宜し代搔をして、後ち中鋤を入れるときは、小土が耕土の底部に沈むから、水が底に漏れない様になるのである、佐賀の平野の如き、踏車で水を踏み揚げ、灌漑する所では、中鋤を入れて、水を漏洩せしめぬ様にする必要がある。

四、肥料は能く搔き坦し且つ、懇ろに散布すること、荒肥の如きは、特に能く搔き坦らし、且つ人手を用ひて能く散布し、斑のない様注意せねばならぬ、如何となれば、肥料の多く埋りたる所に、稻を植ゆるときは、反つて稻が萎縮するものである、之は、脱酸作用とて、水中にある酸素を、稻根と荒肥と、雙方より奪ひ合つて、稻の根が負けるからの事である、元來、稻根は酸素がなくては、生活が出来ず、荒肥も亦た然り、で、酸素がなくては、腐敗することが出来ないからの事である、右の如き、道理にて、何れの肥料にても、懇ろに散布し、一所に集ま

らざる様注意せねばならぬ。

## 第七章 稲作肥料論

### 第一節 總論

稻に對し、大收穫を得る肥料の知識は、未だ充分に堂奥に迄進まないのである、此の肥料の知識が、充分に進んだならば、多大の收穫を得ることが出来ること、思ふ。

某縣の技師、著者の寓所を訪ふて曰く、『吾縣では、三石の米が熟つてさい、稻が倒れるのに、四石五石と云ふ米が、何うして熟るだらうかと、疑ひの意味を以て、農家が謂うのであつたと』然り、最もの事である、斯の如き、疑問の起る人は、臆て成功の人である。

米が、四石や五石成つても、倒れぬ様にするには、稻の莖稈が強くなければならぬ、今茲に、三要素なる肥料の性質を述べて見よう。



窒素なる者は、常に葉肥と云ふのだが、葉許り作る者ではない、葉に多く働くと云ふ意味である、例へば、葉に六分働くならば、實及び莖には二分づゝ働くのである、磷酸は、實肥と云ふが、實許り作る者ではない、實に多く働くと云ふ意味である、例へば、實に六分働くならば、葉及莖には、二分づゝ働くのである

●●●●●  
三要素の作用

		窒素	磷酸	加里
莖	實	葉		
二分	二分	六分	二分	二分
			六分	二分
				六分

加里は莖肥と云ふが、莖や根許り作る者ではない、莖や根に多く働くと云ふ意味である、例へば、莖に六分働くなら、葉及び實には二分づゝ働くと云ふ、合である、夫で、莖程を強くするには、是非とも加里を多く施すの必要がある、西瓜を栽培する上に於て、大豆粕を與ふることあり、また菜種粕を與ふることがある、此の兩者の肥料は西瓜に如何なる結果を來すやと云ふに、大豆粕

を與へたる者は、大形の西瓜が出来るけれども甘味が乏しいのである、菜種粕を與へたる者は、小形の西瓜が出来るけれども甘味が多いのである、吾々は大形にして甘味の多き者を希望する譯である。

稻に於ても然りて、大豆粕を使つた者は、草出來は宜しいけれども、糞が多い、菜種粕にて作りたる稻は、草出來は悪いけれども糞が少ない譯である、吾は、稻も大形に出來て、糞の無いのが希望する所である。

稻の收穫の多少は、第一には、一坪の稻數の多少、第二には一穗の糞の多少に關するのである。

稻の一坪の穗數は、種類によりて異なる而已ならず、栽培方の巧拙に依りても、少々は異なる者であるが、左に出穂數と收量との關係を示せば、大要左の通りである、

一坪に於ける出穂數

一段歩に於ける數量

千五百本

十五俵

千四百本	十四俵
千三百本	十三俵
千二百本	十二俵
千〇百本	十一俵
千本	十俵
九百本	九俵
八百本	八俵
七百本	七俵

一穂中の糝の多少は、亦た收穫に大關係を及ぼす者である、今糝の多少と收量との關係を示せば左の通りである。

總	糝	充實したる糝	半充實したる糝	糝	一段收量
一〇〇粒	一〇〇粒	九五粒	三粒	二粒	十五俵
一〇〇粒	一〇〇粒	九〇粒	五粒	五粒	十四俵

一〇〇粒	八五粒	八粒	七粒	十三俵
一〇〇粒	八〇粒	一〇粒	一〇粒	十二俵
一〇〇粒	七五粒	一三粒	一二粒	十一俵
一〇〇粒	七〇粒	一五粒	一五粒	十俵
一〇〇粒	六五粒	一八粒	一七粒	九俵
一〇〇粒	六〇粒	二〇粒	二〇粒	八俵
一〇〇粒	五五粒	二三粒	二二粒	七俵

右の如く、例へ稻の出來榮は、一樣に大形に出來て居ても、糝の多少に依りて、或は十五俵も收穫があれば、或は七俵位しか、收穫が無いものもある譯である。

詮ずる所、一坪の穂數が多く、且つ、一穂の糝が少ない様に作らねばならぬ、斯の如く、稻を栽培するに於ては、肥料其他に於て、大に注意を要する譯である。

第二節 石數に依る玄米糝皮秤の重量

稻と云へば、玄米もあれば、糝皮もある、藁もある、根もあるが、茲には、根は加へ



酸が一貫二百二十匁加里が二百七十匁である、七石のときは、窒素が五貫九百三十匁、燐酸が一貫七百十匁、加里が三貫五百四十匁を含有して居ることになる、必ずしも、これ丈が、地中より吸収せられたとは限られないのである、或は之れ以上吸収されたかも知れないのである、またこの含有量が肥料を興ふる標準ともならないのである、如何となれば、作物は夫れ／＼肥料を吸収する率が異なるからである、又た地味に依つて、善悪があり、又た天然給源として、雨水より来る養分もあり、又た澆灌水より来る養分があるからの事である、夫で此の三成分含有表は吾々農業家の参考物にしかならない譯である。

#### 第四節 稲作上、収量の多少と、施肥率との關係

##### 一、從來の稲肥料率

稲作栽培上、施肥率に就ては未だ極端より極端迄は、研究せられ居ないのである、從來の稲作肥料試験報告を読んで見れば、何れの報告も、施肥分量の順

序に於て、窒素を第一位とし、燐酸を第二位とし、加量を第三位としてあるが尙ほ精しく云へば、窒素が二〇〇ならば、燐酸が一五〇、加里が一〇〇と云ふ

窒素	二〇〇
燐酸	一五〇
加里	一〇〇

如き、有様であるが、著者の考ふる所に依れば、稻の施肥率なる者は斯の如く、一定不變の施肥率では無いと思ふのである、右の如き施肥率は少量なる、二石や三石の收穫を得る、施肥率としか思れないのである、夫で五石六石と云ふ、多量の收穫を得る施肥率としては、別に考案するの必要がある、茲に於てか、稲作の最大收穫を叫ぶと同時に衛生的稲作法を絶叫し、施肥率の大革命を唱導せざるを得ざる場合に立ち至つたのである。

這般の五石懸賞に於て、稲作栽培上、施肥率に就き、著者が農業家一般に、勸誘奨励寢食を忘れて、活動し來りたる所は、玄米五石六石といふ、最大の收穫を

得るには、是非とも、従來の施肥率を轉倒し、加里を第一位とし、磷酸を第二位とし、窒素を第三位となし、而して、稻の根莖を大に強硬にすると同時に稲作衛生に注意するに非れば、最大收穫は到底望まれないと謂うて居たのである。

二、最新の稲肥料率

要するに、稻の施肥率なる者は、左の如き状態の者である。

- (一) 稻の施肥率は、従來の如く、一定不變の者に非ずして、收量の多少に依りて異なる者である。(最多收穫的に衛生的を加味す)
  - (二) 收量二三石の時の施肥率は、窒素、磷酸、加里の順序なれども、收量六七石の施肥率は、加里、磷酸、窒素の順序でなからねばならぬ。(衛生的)
  - (三) 收量五石の時の施肥率は、各等分に施さねばならぬ。(衛生的)
- 今、施肥率に付き了解し易からんため、左に表を以て示すのである。
- 三、玄米收量の多少と施肥率との關係

窒素	二石	三石	四石	五石	六石	七石	備考
磷酸	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	
加里	四〇	七二	八五	一〇〇	一三五	一三〇	

右表の理想とする所は、僅かの收量であれば、加里は特別に與へないでも出来るのである、夫で僅か二石位の收穫に於ては、窒素が百なれば、磷酸は六十加里は四十位で、宜しいのである、之が即ち施肥率に於て、窒素が第一位で、磷酸が第二位で、加里が第三位である譯である、次に、五石位の收穫になれば、窒素、磷酸、加里、各等分に、施肥率を組立たねばならぬ、即ち窒素一〇〇、磷酸一〇〇、加里一〇〇となる譯である、尙ほ六七石の、最大收穫となれば、窒素が一〇〇、磷酸が一三〇、加里が一六〇となる譯で、施肥率の順序が、加里が第一位で、磷酸が第二位で、窒素が第三位になる譯である。

尙一層明瞭ならしめんため、左に表を掲ぐれば。

四、玄米收量の多少と施肥率との關係に於ける實例其の一

室素	二石	三石	四石	五石	六石	七石	備考
一、五〇〇貫	二、〇〇〇貫	二、五〇〇貫	三、〇〇〇貫	三、五〇〇貫	四、〇〇〇貫	四、〇〇〇貫	佐賀アハ窒
九〇〇	一、四一〇	二、二二五	三、〇〇〇	四、〇二五	五、二〇〇	乃至一貫目	素ハ五百目
六〇〇	一、〇八〇	一、八二五	三、〇〇〇	四、五五〇	六、四〇〇	ナ減セヨ燐	乃至一貫目
						其儘施セ	燐

右の表に依れば、二石收穫のときは、窒素は、一貫五百目で、燐酸が九百目、加里が六百目である五石の收穫のときは、窒素も、燐酸も、加里も、各三貫目である、七石收穫のときは、窒素が四貫目、燐酸が五貫二百目、加里六貫四百目と云ふ譯である、然れども、實際に施行する場合に於ては、大に注意を拂はねばならぬことは、地味との關係があるからの事である。

又た肥料と云ふ者は、窒素でも、燐酸でも、加里でも、多過ぎて宜い者は一つもないのである、而し、其内でも、窒素が多過ぎるのが、一番、害が強いのである、佐賀地方では、窒素の多過ぎる事はあるが、燐酸と加里が多過ぎると云ふことは殆んどないと云つて宜しいのである、又た燐酸と加里が多過ぎたとした所が、窒素の如く、甚しく害がないのである、實際上に於ては、窒素肥料の多過ぎての失敗而已と云うて宜しいのである。

四、同上實例其の二

稻作肥料に就ては、大分極端より極端まで論述したのであるが、一般には随分誤解と云ふ者があるから、尙詳細なる實例を掲げて参考に供するのである。

大豆粕	二石	三石	四石	五石	六石	七石	備考
二〇貫	二六貫	三二貫	三九貫	四五貫	五一貫	五二貫	佐賀アハ窒
四	七	一〇	一五	一六	一六	一六	乃至一貫目
二	五	一一	一九	三一	四六	四六	ナ減セヨ燐
							其儘施セ

右は、大豆油粕と、過燐酸石灰と木灰の三種の肥料を以て、稻作をなすこと、

假想して、肥料を組立てる者である、此三種の肥料に含有して居る三成分は、肥料率に、恰當して居る者ではあるけれども、實際上は三種にて、稲作りすることはないのである、尙序でに、菜種油粕と、過磷酸石灰と、硫酸加里の三種を以て、肥料率に合するときには、左の通りである。

菜種油粕	二石	三石	四石	五石	六石	七石	備考
過磷酸石灰	三〇 <sub>貫</sub>	四〇 <sub>貫</sub>	五〇 <sub>貫</sub>	六〇 <sub>貫</sub>	七〇	八〇 <sub>貫</sub>	所ニヨリテ
硫酸加里	一	一	二	四	七	一〇	ハ油粕ハ五テ
	二	四	七	一二	一七	二四	ハ至十貫
				四	七	一〇	ナ減セヨ
							里ニハ其
							儘宜シ

此の表を、熟視すれば、大豆粕と、菜種粕とは、大に性質を異にし居る者で、菜種油粕には、磷酸及加里が多く含まれてゐる事が分る。

右論じたる所を、達観すれば、肥料さへ施用すれば、何れの土地でも、六石や七石の米が取れる様に思へども、左に非ずだ、大收穫を得るには、土地の實力を認めねばならぬのである、茲に、耕土五寸の田地が百枚ある、百枚あれば百枚

とも、五石の收穫があるかと云へば、其内五十枚は、五石作の候補田となつても、後の五十枚は、五石作の候補田にはならないのである、言を換へて言へば、五十枚は、地味宜しけれども、五十枚は、地味が悪くて實力がないと見ねばならぬ、詮ずる所、最大收量を得る田地は、肥料を少く與へて、澤山出来る所で、地味が完全でなければならぬ。

尙、一層明瞭ならしむるため、左に表を掲ぐるれば。

第五節 玄米收量の多少と、地力及肥力との關係

割	力	力	二石	三石	四石	五石	六石	七石
合	力	力	二五	三〇	三五	四〇	四五	五〇
地	力	力	七五	七〇	六五	六〇	五五	五〇
肥	力	力						

右の表に依りて見るときは、收量少き二石位るときは、地力が二五で、肥力七五である、即ち收量少きときは、地力は悪くても、肥料の力で、自由にすることが出来るといふ意味である、五石位るときは、地力が四〇で、肥力が六〇であ

る、段々肥力が減じて、地力が進んで来たのである、七石にもなると、地力が五〇で、肥力も五〇である、要するに、收穫を多く取る上に於ては、肥料の力而已にては行かない、地力、即ち、地味と云ふことを充分に認めねばならない次第である。

### 第六節 最大收穫上肥料の選擇

吾々が、稻を栽培する上に於て、二つの目的がある、一は、**經濟的稻作栽培**、二は、**向上的稻作栽培**である。

#### 一、經濟的稻作栽培

經濟的稻作栽培とは、收支計算上、利益ある栽培方にして、極端に云へば、無肥料の栽培が、佐賀郡の如き、肥沃の土地では宜いかも知れぬが、之も何年も繼續するときは、反て收支償はない事になる、夫で相當に肥料を與へねばならぬ、肥料を與ふる以上は、其肥料の種類を選ばねばならぬ、今稻作肥料が安價に出來上る、肥料の組立方は、

- (一) 窒素は、紫雲英、蠶豆莖、大豆莖等より取ること。
- (二) 磷酸は、過磷酸石灰より取ること。
- (三) 加里は、木灰及硫酸加里より取ること。

右三項に依りて、稻作肥料を組立たならば、大に經濟的である、大に安上りがして、儲かりが多くて、算盤玉の上に於て、都合が宜しいのである。

併し乍ら、前記三者の者より、肥料を取るときは、稻作は作り難いのである、往失敗者を出すことは、覺悟の前である、農業上の知識を得て居る人は、失敗の事はなけれども、無學の人では失敗勝である、夫は莖稈が柔軟に出來るとか、病蟲害に侵さるゝとかする譯である、大に注意を拂ふべきことである。

#### 二、向上的稻作栽培

向上的稻作栽培とは、少し文字も穩かでないかも、知れぬが、左の如き意味を以て居るのである。

- (一) 算盤玉では比較的儲りが少ないかも知れぬ。(衛生的強健)



- (一) 日本農業家の稲作の技術を世界稲作界に提供するのである。
- (二) 神佛に向つて、人間の技術の進歩を奏上するのである。
- (三) 農業界に興奮劑を興ふるのである。
- (四) 最大收穫法が發明せらるれば、經濟的稲作栽培法は、從て發明せらるる者である。
- (五) 最大收穫法が發明せらるれば、經濟的稲作栽培法は、從て發明せらるる者である。

右の様な意味を以て、向上的稲作栽培と名けたのである、判り易い様に言へば、算盤玉には損かも知れないけれども、最大收穫は何程取れるのであるかを研究するにあるのである、併し、現在の所で、未だ報酬漸減率に、遮斷されて進むことの出来ない状態ではない、未だ夫れ迄には、澤山の距離があるのである、詳言すれば、六石の米を得ても、未だ澤山の純利があるのである、之は別に計算表を示すのである。

最大收量を得るには、肥料も、少しは注意せねば、出來ないのである、普通の肥料ならば、何でも宜しいとは言へないのである、今最大收量を得る爲に要す

る、肥料の組立方を述べれば左の通りである。

- イ、窒素は、銚粕、菜種油粕等より取ること。
- ロ、磷酸は、骨粉より取ること。
- ハ、加里は、木灰又は、硫酸加里等より取ること。

等であるが、窒素を、銚粕や菜種油粕より取るときは、稻が赤味を帯びて、成長するのである、磷酸は、骨粉より取るときは、玄米が油氣を帯びて、光澤が宜しいのである、兎に角、稻を栽培する上に於て、強健に出來るから、病蟲害の患ひ少く作り易い譯である、(衛生的栽培)併し乍ら、肥料の代金は他の肥料よりも、何程か高價になる譯である、亦た大豆粕の窒素と、菜種粕の窒素は異なる者である、過磷酸石灰の磷酸と、骨粉の磷酸も然りである。

### 第七節 五石懸賞合格者の施肥及配合

肥料の分量及配合は、其の土地に應じて、施さるべからざることとは判り切りたることである、茲に掲げる所は、一々、其事情を異にして居るから、肥料其者

が、異なつて居ることゝ、察して貰はねばならないのである。

一、永淵清次郎君稲作肥料設計

元肥	追肥	加肥	三成分
青刈大豆 八十貫	下肥 四十貫	窒素 三貫八百六十八匁	
堆肥 百六十貫	大豆粕 十貫		
下肥 五十貫	精過磷酸 二貫五百匁	磷酸 三貫七百八十三匁	
菜種粕 二十五貫	木灰 六貫		
骨粉 八貫	藁灰 十貫	加里 四貫	
右	硫酸加里 一貫五百匁		
	鹽化滿俺 一貫五百匁		

右、肥料中、菜種粕や、骨粉、硫酸加里を施用し居るのは、少し注意を拂つた次第であるが、鹽化滿俺を施用したる事は尙ほ更に注意を拂つた次第である。此の鹽化滿俺は、吾人の食物と比較せば、胡椒や、薑や、蟹漬の如き者で、食慾を増

進せしむる者である、蟹漬を用ゆれば、直に、二三杯位の、御飯の喰方が増加するのである、稻に於ける、鹽化滿俺も夫と同じ道理で、肥料を多く吸収する譯である。

二、田中源地君の稲作肥料設計

元肥	追肥	加肥	三成分
下肥 百貫	菜種粕 二十貫	窒素 二貫二百八十五匁	
過磷酸石灰 拾貫		磷酸 二貫二百九十八匁	
乾鰹 七貫		加里 五百九十七匁	

三、山田伊三郎君の稲作肥料設計

元肥	追肥	加肥	三成分
堆肥 二百貫	一、緋粕 五貫	窒素 二貫七百四十二匁	
藁灰 二十貫	二、硫酸加里 四貫	磷酸 三貫二百八十匁	
骨粉 五貫	三、五號肥料 五貫	加里 三貫八百六十四匁	

二 千 五 號 肥 料	十 貫	四、鹽化滿俺 一貫五百匁	五 貫
----------------------------	--------	-----------------	--------

右肥料中、鯀粕や、骨粉や、鹽化滿俺や、硫酸加里を施用したるは、特に注意したる點である。

四、中副青年會稻作肥料設計

元	肥	追	肥	三	成	分
鯀 粉	十六貫	配合肥料	十貫	窒素	二貫二百二十八匁	
骨粉	十貫			磷酸	三貫三百六匁	
硫酸加里	四貫			加里	一貫九百九十二匁	

此の肥料も、鯀粕、骨粉、硫酸加里を施用したるは特に注意を拂つた次第である。

五、高園岩吉君の稻作肥料設計

元	肥	追	肥	三	成	分
堆肥	百五十貫	硫酸加里	五貫	窒素	二貫六百六十匁	
藁灰	十貫	菜種粕	五貫	磷酸	五貫三百四十五匁	
骨粉	十貫	過磷酸石灰	十二貫	加里	六貫百九十五匁	
硫酸加里	五貫					
菜種粕	十五貫					
乾鰯	五貫					

右は六石六升餘を、收穫したる者であるが、骨粉や、硫酸加里や、菜種粕で設計したる者である、而し、此の土地は、蠶豆の跡地である、夫で窒素が非常に少なくして、大收量を得たる所以である、又た加里及磷酸を思ひ切りて、多く施用したから、著しき效驗を呈したる譯である。

前にも述べたる通り、肥料設計は、其土地の事情、及前作物等の事情を、充分斟酌して、設計したる者であるから、此の設計を、直に真似たる所が、失敗するとは受合である、又た前年合格したる土地にしても、本年も、同一の設計にて

宜しきやと云ふに、本年は異にせなくてはならぬ、如何となれば、窒素肥料の如きは、逃げる者なれども、磷酸、及加里は逃げないから、磷酸、加里は、何程か、減少して宜しいが、之に反して、窒素は増加せねばならないのである。

### 第八節 施肥の秘訣其他

#### 第一項 施肥の秘訣

農家は、大抵先祖代々幾百年となく、繼續し來りたる者である夫で、また是より後も、幾百年となく、繼續するのである。兎に角、一年限りの百姓でない、然れば、肥料を施す上に於ても、遠大なる考を以て、土地を愛するの心掛がなければならぬ、今肥料を施す上に於ての、秘訣を述べて見よう。

- 一、稲に肥料を與ふるに非らず、土地に肥料を與ふること。
- 二、肥料の力にて、稻を作るに非らず、地方にて、稻を作ること。
- 三、追肥よりも、待肥を原則とすること。
- 四、前三項に、一步たりとも、近づく様、心掛くること、肝要のこと。

一年限りの農業なれば、如何にしても宜いけれども、千代に八千代に、農業をなす者なれば、永遠の事を考慮せねばならぬ、併し世の中には、随分石灰を施すやら、或は糞を、製紙場行として賣却するやらする者があるので、土地は、衰耗する許りで、掠奪農業として、土地から訴へられても致し方は無い者ばかりである、亦た稻の方から云へば、地主の儲けは、玄米丈けに止めて貰ひたい、而して、稻藁は土地に返却して貰ひたい希望なのである、切に、農業家諸君の、熟慮を煩はす次第である。

#### 第二項 肥料を與ふる時期

に於ては、待肥の筆法から論ずれば、肥料の種類に於ては、前作物に與へて置かねばならぬ、場合もある、亦、麥畦、耕耨の際與へて置く場合もあるのである。元來肥料は、水と抱合せしむべき者でなくて、土と抱合せしめねばならぬ、夫で、插秧の代掻のとき、油粕を散布するとか、過磷酸石灰を振り蒔く如きは、無智の遣り方としか、思はれないのである。

肥料は何んでも、一應醱酵せしむるか、又は腐熟せしめて用ゆるのが、正則である。夫で、油粕でも、米糠でも、藁でも一應醱酵せしめて與ふる様にせねばならぬ。藁類は、厩肥とするが、堆肥とするか、何れかなさねばならぬ。未熟の肥料を與ふれば、脱酸作用の害に遭ふか、或は病蟲害に侵さるゝことが多いからの事である。

### 第三項 中稻及び晚稻の追肥

追肥の原則に於ては、土壤の所に於て述べて居たから、茲には述べないのだが、中稻及晚稻の追肥に於ては、種々の事情を異にするから、一概には言へないが、佐賀郡では、中稻には元肥に六分、追肥に四分、晚稻には、元肥に四分、追肥に六分であるが、中稻の時分は未だ時候が寒いから、元肥に六分、追肥に四分として、元肥に多く追肥に少くする譯である。晚稻のときは、餘程暖氣になりたるときだから、元肥に多く施すと、一時に肥料が、作物に供給せられて、早榮がするのである。之れが即ち普通の理窟であるが、中稻が早榮をすれば、稻穂

象の被害を受けるから元肥に多く與ふることの出来ない場合もある。夫で實地問題で通り一遍の理窟で行かないのである。

### 第四項 稻の早榮への原因

稻の早榮へは、中稻而已ならず、晚稻にもある如何なる原因に依りて生ずるやと謂ふに、

- 一、石灰濫用の結果、有機物の減耗を來し、從て、肥料を吸収保蓄する上に於て都合悪しきこと。
- 二、淺耕の結果、耕土薄き者なれば、肥料の吸収保蓄上都合悪しきこと。
- 三、藁類を賣却して、肥料として土地に返還せざるを以て、土壤の有機物減少したること。

右の通りであるから、豫防策としては、

- 一、深耕をなすこと。
- 二、藁類を肥料とすること。

三、客土法を行ふこと。

四、原肥を少くし、已むを得ず、追肥を分施することに努むること。

五、晩田繁忙中と雖、中稻の見舞をなすこと。

であるが、早榮へをなせば、一時に榮へて、後に肥料不足に遭ふとか、或は忽然稈落をなし、收量半額に減ずることがある。此の稈落は耕土の淺きところ、又は土地の乾燥し過ぎる所に、生ずる者である、即ち踏車にて今一回水を多く與ふべしである。

第九節 肥料養分の作物に吸収せらるゝ量

肥料を與ふれば、全部作物が吸収するかと云ふに、左様に非ずだ、其幾分を吸収するに止まるのである、左に、稻が、窒素、磷酸、加里を吸収する量を示すのである。

- 一、稻作の窒素吸収 八〇
- 一、蒸製骨粉、乾魚、鱈粕、血粉、 八〇

- 一、粗骨粉、燒酒粕、角粉、海鳥糞、 七二
- 一、下肥 六六
- 一、米糠(新) 二六
- 一、硫酸安母尼亞 三一
- 一、綠草 二三

右の表に依りて見れば、稻が窒素を吸収するのは、鱈粕なれば八〇、下肥なれば六六、綠草なれば、二三と云ふ様に、段等があるものである、但窒素の吸収は、畑よりも田の方宜しいのである。

二、稻作の磷酸吸収

- 一、重過磷酸石灰 二〇、九〇
- 一、沈澱磷酸石灰 二一、五五
- 一、トーマス磷酸 一二、〇〇
- 一、粗骨粉 一五、〇〇

一、蒸製骨粉

一四、七五

一、海鳥糞

八、三〇

一、磷礦粉

一、一五

右の表に依りて見れば、沈澱磷酸石灰は百分中より二一を吸収するので、大體に於て、磷酸は、吸収力が弱いのである。蒸製骨粉で一五許であるが概して、磷酸は、田畑に於て、效驗の違ひはないのである。

三、稲作の加里吸收

有機體、無機體とも百分中、五〇の吸収力である、即ち五割の吸収力と云ふこととなる、而し硅酸加里は、少々少く吸収するのである大體上より云へば、稲の肥料吸収力なる者は、窒素が最も強くして、磷酸が最も弱く、加里は中間に居る者である。

第八章 田植に關すること

田植とは苗を引き抜きて、本田に移植するのを云ふのだが、稲に於ては一世一代の典禮で、處女の婚嫁する如き者である、夫で此の時の最も注意すべきことは、知らず知らずの内に、本田の家風に、慣れて、活着するといふことである、田植の時は、種々の注文も出る、老婆心も起る者であるが、用水は、相應にせなくてはならぬ、時候は暖氣でなければならぬ、日光も餘り強くつては宜しくない、半ば曇天位で宜しいのである。

第一節 田植繩、及田植定木

佐賀縣では、農家一般の申合によりて、正條植をなすことになつて居る、今の世の中に、正條植が出来ない様の所は、世の中に數歩後れて居る所だから到底五石懸賞の如き者に合格する譯はないのである、又た佐賀郡では、正條植を施行する方式は、一、定木植、二、一本隔繩張植に確定せられて居るから、其他の方式は採用することは出来ないのである、夫で右の二式に向つて一直線に進まねばならぬ。

右の如く、定木植をなすか或は繩張植をなすことになれば、年々、田植前に於て、定木と田植繩とは、検査をなさねばならぬ、往々、途中に切斷された者を、結び付けてあるとか、或は鼠が害をなしたとかで、田植の場所に持ち行きて、大に魔誤付くことがあるから、田植前の休閑の時に検査をなし置くの必要がある、田植始めてから勢子が能く合ふたとか、茲が合はないとか云へば、田植指揮官も、大に心痛だから、呉れ〜前以て注意を拂つて置くの必要がある。

第二節 田植組

田植時は、一ヶ年中の、最大繁忙の時期なれば、種々の聯合團體も出来る者である、一、自家組、二、親族組、三、隣家組、四、雇人組等であるが、箱入娘様まで出て、加勢をすると云ふ意氣込のときだから、監督人たる指揮官は大に用意周到でないと失敗するのである、殊に、雇人組の如きは、段別を多く植れば、賃金が多く取れると云ふ如き、悪弊も添うて居る者なれば、早さが善しに進むのである、夫で六拾株の見當であつた者が、收穫のときは、五拾五株しかなかつたと

云ふが如きことは、往々あることだから、大に注意せねばならぬ。

第三節 苗取り

苗代が、薄蒔になればなる程、苗は強健に出来る様になるから、苗は取り難いのである、夫で苗を取る上に於て、大に時間を要することは明かであるが、夫は收穫の上に於て、大に效驗を現はす者なれば、苗取の節は、大切に、一本、一本宛抜き取る様注意せねばならぬ。(苗取は柄無鍬を土中に差込み根を切れば苗が能く取れる)

第四節 田植式

田植には、種々の方式ありて、一、亂雜式、二、正方形式、三、長方形式、四、親子長方形式等があるが、植方の方式の異なるに依りての收量の多少は、實に微々たる者である、唯だ長方形式が、日光の工合ひ、仕事の工合が、少々都合宜しい次第である、今、左に表を以て示せば。

本	馬	垣	間	株
數	場	間	間	數



田植株數表

三本植	三本植	三本植	二本植	二本植	一本植	一本植
九寸	九寸	八寸五分	八寸	一尺一寸	一尺一寸	一尺一寸
九寸	八寸五分	八寸五分	八寸	六寸	五寸	四寸
四十五株	四十七株	四十九株	五十六株	五十四株	六十五株	八十一株
六	八	二	五	四	八	八

稻の株數の如きは、一定することの出来る者ではない、夫は、苗の出来具合と、地味と、肥料の加減一つにて、少々の増減は生ずるからの事である、苗の如きも、一本植とか、二本植とか定むるのは、其出来方一つに依る者である、要するに苗が能く出来て、肥料を充分與ふることさへ出来れば、一坪、四十四五株で一本植で澤山である、夫でも、大株は三十穗、小株は十五穗位で、平均二十穗位になる、西川副村の西南里は、一部落、全部、四十五株の一本植であつたが、好結果を呈して、段當り四石以下の田は、一枚もないと、古賀青年會長は威張て居

たのである。

### 第五節 密接植

植方に於て密接植と云ふ言葉が出来たけれども、此の密接植の範圍は、漸次狭くなるのである、之は、苗の拵へ方が、進歩して來たこと、肥料を多く與ふるからの事である。

### 第六節 淺植の利益

淺植したる苗は、分蘖力強く、深植したる苗は、分蘖力弱いのである、夫で淺植したる苗は、稻株が散開して、本數が多いのである、亦た深植したる者は、稻が緊束して、本數が少ないのである、之は、少しく注意すれば、此の稻は淺植である、此の稻は深植であるといふことが、直に判る様になるのである。

### 第七節 苗の方向

序に述べるのであるが、稻の方向といふことに就て、將來は八釜敷い時代があらうと思ふ、檜樹の如きは、表裏がある、其裏面を日光に向く様に植付ると

きは檜樹は枯死するのである、杉樹でも樹皮が正直に配列せられずして、斜に配列せられたる者がある、之は植付の際、裏面を太陽に向く様に植ゑたものだから、樹木が廻轉する譯である、一度廻轉し始むると、一世涯回轉するのである、斯の如き樹木は製材して板となしたならば、板目に斑紋が多くて、宜しいけれども、柾目は到底取れないのである。

苗は如何なる方向に發展するやといふに、可成光線に多く接する様、發展するのである、左右に扇形に、發展するのである、夫で菖蒲苗の稜角のある方は東西に向く様に植ゑねばならぬ、南北に向く様に植ゆれば、稲は螺ぢられて、方向を轉せねばならないのである、現在の農業家に向つて、稲が植方の方向に付て請求しても、五本も六本も一束となして、植付ても恬として顧みられない時代だから到底駄目である、諦めねばなるまい。

#### 第八節 苗の補植

田植してから、一週間許りの内に、苗の補植をせねばならぬ、田植のときは忙

しきことだから、植方に於て粗略もある、亦た多人數で植ゑる事もあるから、上手もあれば下手もある譯で、補植の必要がある、補植をするには、活苗をなし置くのである、今では苗の強き者が出るから、活苗の保存も僅少で宜しき而已ならず、一度補植すれば、夫で宜しいのである。

#### 第九節 田植の時期

田植の時期なる者は、其部落に依りて、從來よりの慣例もあることだが、之は時候やら、用水の順序やら、稻の性質やらで、大略確定し居るのである、夫で、中稻は何月何日頃、晚稻は何月何日頃と、其植付時期に適合したるときがある、夫で其の適合したる時期に植付ねばならぬ、佐賀郡では中稻の移植期を今より少しく引き下げ、晚稻の移植期を少し引き上げる必要がある、所が害虫の被害を恐れて、時期を大に後くらす者がある、これ等は稻の成長と害虫の被害とを混同して、差引勘定を爲さんとの計略なれども、左様容易くは問屋が卸さぬので、時候後れの爲め、稲は成熟期を誤り、秋期の早冷に叩かれ、辛

うじて段當り二三俵の收穫に止まることがある、之に反して移植期に植ゑたる者は、十俵以上も收穫がある有様であるから、拔け馳けする様な、場外れたことはしない方が宜しいのである。

## 第九章 稲作除草論

除草と言つても除草而已でない、中耕を兼帶し居る事は誰も云ふ所である、而して第一回の除草の如きは、特に注意を拂つて行ふべき者である、若し土塊の反轉、充分ならざるときは、雜草の發生多くして、到底絶滅の期なしと云ふべきである、併して除草は懇切に四回以上行ふべきである、稗の撲滅が根本的に行はれないのは、残念なる次第である、折角稗を取りても、畦畔に投棄するか道路に投ずるか、堀中へ投ずるか、或は畦畔へ束を作りて堆積し置くか、特に注意して、自宅迄持來りたる人も、庭内へ實が落るのを其儘放任するとか、厩中に投ずるとかするので、切り碎き煮炊して牛馬に與ふる者は、殆ん

ど無いのである、煮て牛馬へ與へた以外の者は、全部再び田の中へ這入る者で、庭内に散布されたるものや厩の中に這入りたる者も、肥料に混合せられ、道路の者は、水と共に田の中へ、堀の中の者は、泥揚げと共に、肥料に混ざる譯である、現今の如き、稗の除去方は、今年の米の中には稗が混じてはならないが、來年は再び來り給へと祈る如き者である、詰らぬ遣り方ではないか、根本的に誠意誠心、撲滅に盡力したい譯である。

除草と云へば、完全な除草器がある、之は二宮先生の除草器である、二宮先生は農家を上中下の三段に分れた。

- (一) 上農は草を見ずして草をとる
- (二) 中農は草を見て草をとる
- (三) 下農は草を見て草を取らず

上農となるには、草を見ずして、草を取る位にしなくてはならぬ、中耕の如きを遣るは、上農の仕方である、此の二宮先生の金言は除草而已に非ず、萬事萬

端斯の如き心掛を持すること肝要であることを教へられたのである、之と殆んど類似したる言葉がある、茲に掲げて見れば、

- (一) 上農は明日の爲に働き
- (二) 中農は今日の爲に働き
- (三) 下農は昨日の爲に働く

であるが、尙之を廣く擴げて見ると、

- (一) 上農は來年の爲に働き
- (二) 中農は今年の爲に働き
- (三) 下農は昨年の爲に働く

となるのである、要するに、仕事から追はれてはならぬ、仕事を追ふ様でなくてはならぬ、實に注意すべきことである。

### 第十章 稲作の一代

稲作の一代と云へば、苗の生立より、收穫迄を云ふのであるが、其間に於て、苗代期、挿秧期、分蘖期、伸長穂孕期、出穂開花期等に分類することを得るのである、一目瞭然たらしむるため、今左に表を以て示せば。

時	代	氣	候	時	期	生	育	施	肥	手	入
一、	苗代期	高温、多照	自至	五月	中旬	分蘖苗、稜苗、丸苗	待肥、元氣肥	待肥、元氣肥	除草、間引、灌排	除草、間引、灌排	除草、間引、灌排
二、	挿秧期	高温、多照	自至	六月	下旬	淺植、活著、發根	待肥、元氣肥	待肥、元氣肥	正條植、蟹瓜打、	正條植、蟹瓜打、	正條植、蟹瓜打、
三、	分蘖期	高温、多照	自至	七月	中旬	植付後四十日有效	待肥、元氣肥	待肥、元氣肥	害蟲驅除	害蟲驅除	害蟲驅除
四、	伸長穂孕期	多照、高温	自至	八月	下旬	出穂後三週間前	待肥、元氣肥	待肥、元氣肥	二番除草、病	二番除草、病	二番除草、病
五、	出穂期	高温、有濕	自至	九月	中旬	出穂後三週間前	待肥、元氣肥	待肥、元氣肥	四番除草、病	四番除草、病	四番除草、病
六、	開花結實期	高温、多照	自至	十一月	下旬	日の開花は一日、二時	待肥、元氣肥	待肥、元氣肥	漸次落水、刈取、	漸次落水、刈取、	漸次落水、刈取、

右表に付て少しく説明を試みやう。

#### 第一節 苗代期

苗代期は温度は高くして、且つ晴天續きが宜しいのである、時期は所に依りて異なるから、何とも云ふことは出来ないものである、而して苗には分蘖苗も

稜角苗も丸苗もあるが、分蘖苗と稜角苗は、宜しく丸苗が最も劣等である、肥料は待肥であるが、苗抜取の一週間前に、元氣肥料を與ふるのである、手入としては、除草も稗取も必要である、殊に苗の間引位は爲さんと、完全の苗は出來ないのである、灌排水に注意し、浮塵子、稻椿象、及螟蟲の捕獲等は、極力施行せねばならぬ。

### 第二節 插秧期

插秧期は溫暖にして、濕氣もありて少しく照ると云ふことが必要である、之は直に活著して、發根せねばならぬからの事だ、肥料は、成るべく待肥として、田植前に與ふるのである、植方は正條植、一本植等にして、蟹爪打をなして懇ろに稻の生育を計らねばならぬ、勿論害虫の驅除は怠つてはならぬ。

### 第三節 分蘖期

分蘖期は最も大切なるときで、分蘖の如何によりて、其年の豊凶をトせらるる有様だから、溫度は高くして、且つ日照時も多きことが必要である、分蘖は

植付後、四十日位にて終らねばならぬ、其後分蘖したる者は、結實せないのである、夫で有效莖數は約、四十日以前に分蘖したる者とせねばならぬ、が大體上、七割位の者である、而して、追肥なる者は、植付後一週間目も二週間目も、三週間目も、四週間目も、五週間目も、六週間目もあるが、兎に角四十日位で窒素肥料は終らねばならぬ、燐酸及加里は、四十五日位になりても宜しいのである、除草としては、二番除草、三番除草等必要である、殊に稻椿象の捕獲及螟蟲の捕殺には、極力努めねばならぬ。

### 第四節 伸長、穗孕期

分蘖期では、二三本植たる者が、二十本にも、三十本にも、増加し、且今期に於て其二三十本に増加したる者が、伸長するのである、言を換へて云へば十歳位の兒童なりし者が皆二十歳位の青年となるのである、夫で此の時は、溫度も高く日照時が多くて、稻が強くと出來ねばならぬ。

(一) 妊孕期 妊孕期は大切なる時である、普通農家は、今月腹を捕へて穗朶と

云ふけれども、既に九ヶ月以前に妊孕をして居るのである、肥料を吸収するのは、何時が一番多く吸収するやと云ふに、妊孕前である、夫で分蘖や株張の爲に、家族は十倍にも二十倍にもなり、尙且つ、兒童が青年となり、既に婚嫁して、妊娠前と云ふ有様であるから、肥料を吸収する量の多き事も察せらるゝ次第である、一體、嫁様方も御身體が衰弱して、御座つては、妊娠にはならない者で、一度は是非とも身體強健に御なり遊ばして二人前も三人前も食事が進む様に御なり遊ばしてこそ、間もなくご妊娠と云ふことになる、夫で稲も同じ事、妊娠前には、肥料を多く吸収する譯である。

二、穂揃肥は妊孕の幼芽が五分乃至一寸位になりたるとき、與ふる者である、理想として、妊娠の幼芽が一寸位ときは、少しく肥料か切れたと云ふ位に行つたのが上等である、此のとき穂揃肥を與ふるのである、穂揃肥として一段歩に硫酸安母尼亞二貫位を與ふるか、或は人造肥料の五號五貫位を與ふるのである、此の時の肥料は、分量が少ないから、能く乾きたる土にでも混

じて、散布せないと、全部に行き渡らないのである、此の穂揃肥の時期が早過ぎると、亦た子分かると云ふて稲は迷惑をする、夫で丁度一寸位伸びたるとき、穂揃肥を與ふるのであるから、其幼芽に肥料分が集中して、興奮せしむるか、ら大なる男兒、否な大なる稻穂が出る譯である、此の妊孕期は、出穂期の三四週間以前である。(稻穂の幼芽は稻莖を小刀にて縦に裂けば分かる) 此のときの、手入としては、四番除草の残りもある、害虫には螟蟲終末の産卵時期であるから、全力を注いで捕獲に従事せねばならぬ。

### 第五節 出穂期

出穂期には高温であつて、少々濕氣があつて宜しいのである、餘り乾燥に過ぎると、出穂出來ざる場合もあるのである、此の出穂が終りて穂が出揃ふと云ふことになる、農家に於ては、無上の愉快なる時である、農家は此の出穂揃を望めるより、他に愉快なることはあるまい、農事視察員の多きも、此の頃が眞最中である、而し此の時迄は未だ害虫の撲滅驅除上、今が網際とでも云

ふ可きときで、一生懸命、駆除せねばならない時である。

### 第六節 開花結實期

此のときは、高温多照が宜しいのである。開花は、上部より初まり下部に終る者である。而して一穂の全部開花の終了は、五日乃至十日位は掛るものである。亦た一日の開花時間は一二時間である。而して穂が漸次傾斜する頃になると落水するのであるが、當地方は踏車にて水を揚げることに、刈取後の田土乾燥の爲に水を落すことが早きに過ぎるのである。夫で往々無理枯れがあるのである。夫れ而已ならず、水の乾く如き上田程病氣に掛ることがある。稻の莖稈萎縮の如きは、此の早落水が大に原因して居るのである。

稻の結實は、上部より結實し、下部に及ぶ者である。如何なるときが、成熟なるや完熟なるや、甚だ不明であるが、初め尖端の靱が、緑色でありし者が灰黄色となり、次に稈心が灰黄色となりて、漸次下部に降る者である。夫で今日は是迄穂稈が枯れた今日は是迄枯れたと日々見ることが出来るのである。夫れ

で穂首迄枯れて来たときは其穂一本は成熟したる者と見て宜しいのである。而し一株の中にも早きあり遅きありで、又た一段歩の中には、尙更早きも遅きもある者だから、穂稈が半ば以上穂首迄枯死したならば、其下部の莖幹は、如何に青くとも刈取るべき時期とせねばならぬ。其後は一日遅くるれば遅る、程、雀や犬や鼠や、風や雨やに障害されて、收穫の減ずる而已で、收量の増加する原因は、一として無いのである。

## 第十一章 稲作の害虫

佐賀郡は害虫の本場である。然り日本一の害虫の本場である。害虫の中で最も猛烈なる害毒を流す者は、二化性螟蟲、三化性螟蟲及稻椿象である。此三害虫は、最も執念深き者にて、普通の手段方法を用ひては到底全滅せしむることは出来ないこと、思ふ、其外には縦葉卷蟲が時々現はれるのであるが、今は閉塞して居る。

## 第一節 害蟲の増殖

斯の如く佐賀郡に猛烈なる繁殖をなす原因は、氣候風土が害蟲に適し居る而已ならず、稻なる食物が早くより遅くまであるので、二化も三化も、子孫を繁殖せしむるに、大に都合が宜しいからのことである。

今害蟲の蕃殖に付き少しく述べて見やう、害蟲も人や、牛や、馬や、家蠶や、稻等と同じく、必ず親又は種子ありて幼兒を産んだり、苗が生えたりするのである。夫で害蟲が自然に湧き出づるといふことは決して無いのである。

害蟲が自然に湧き出づると思ふのは、害蟲増殖の割合を知らない無智の者の言葉である、害蟲は場所と食物と温度と湿度と四拍子揃ふときは、規則通りに増殖する者である。

稻は假に粃一粒より十本となり、一本にて百粒を結實する者とせば、一粒の者が、秋の末頃には一千粒となるのである、即ち一千倍となつたのである。蠶蛾が假に五百個の卵を産んだとすれば、一化性は一年に五百疋となり、二

化性は一年に一萬二千五百疋となり、三化性は一年に三百二十七萬五千疋となるのである(但雄蛾各半数宛發生するものとして計算す以下同じ)

稻の螟蟲の母蛾は、假に百個の卵を産する者とせば、二化性の者は、秋季に至り五千疋となり、三化性の者は、秋季に至り二十五萬疋となるのである。

浮塵子が、假に百個の卵を産する者とせば、秋季に至り、三化性の者は二十五萬疋となり、四化性の者は一千二百五十萬疋となり、五化性の者は六億二千五百萬疋となるのである。

夫で苗代するとき、螟蛾及卵を一個採集するも、秋季に至り二化性の者は五千疋を捕殺し、三化性の者は二十五萬疋を捕殺したのと同じ効力が有るのである、尙又た浮塵子の如きも三化性の者は二十五萬疋を捕殺し、四化性の者は千二百五十萬疋を捕殺し、五化性の者は六億二千五百萬疋を捕殺したのと同じ効力がある譯である。

## 第二節 共同生活場



元來此の世界は、人間而已の生活場に造つた者ではない、人類も鳥獸類も、草木類も、共に生活する、共同生活場である、夫で人間は人間の子孫の繁榮を計り、鳥獸類は鳥獸類の子孫の繁榮を計り、害蟲類は害蟲類の子孫の繁榮を計り、草木類は草木類の子孫の繁榮を計り、所謂る生存競争、優勝劣敗(適者生存)の世界である。

### 第三節 人間と害蟲との競争

害蟲は稲が食物である、稲がなくては生活が出来ないのである、人間も同じ事、米が食物である、米が無くては生活が出来ないのである、夫で害蟲と人間との生存競争が起る譯である。

萬物の靈長たる人類が、害蟲と生存競争をなし、敗北を來さんことを恐れて、終に神佛の助勢を祈願する如きことがあつたならば、實に人類として神佛に對し、面目なき次第で、萬物の靈長たる看板は、剥ぎ取れと叱られても致し方はあるまい。

釋迦は一切の衆生には悉く佛性ありと教へられたのである、即ち鳥獸蟲魚は申すに及ばず、草木、苔蘚に至るまで、神靈を有すと教へられた譯である、斯の如く、神佛は慈悲圓滿なる神佛なれば、例へ害蟲撲滅を祈願しても、害蟲撲滅の守札を田畑に立て、も害蟲を撲滅し、人間に助勢なさる如き、依怙偏頗の處置はなさない譯である。

### 第四節 害蟲驅除の必要

世界は優勝劣敗の世界であるから、弱の肉は強の食とならざる様、奮勵努力せねばならぬ、夫で人間と害蟲と極力競争し、終に害蟲を撲滅し、害蟲を征伏するより他に道はないのである、詮ずる所、極力害蟲驅除をなすより他に良策はないのである、世には薄蒔苗や多肥の稲は害蟲が集ると小言を云ふ者があるが、害蟲より見捨らるゝ如き稲を作つては收穫はない、佐賀郡が害蟲の本場たることは、曩に述べたる通りであるが、從て驅除に於て大袈裟なることも、又た第一等である、茲に参考のため、害蟲驅除成績を示せば。

第五節 害蟲驅除成績

佐賀郡に於ける害蟲買上の豫算金額は左の通である。

大正二年度害蟲買上豫算金額 貳千五百圓

大正三年度同上 貳千五百圓

大正三年度に於ける害蟲の種類、買上數量及金額は左の通りである

- 一、螟蟲卵塊數 百四十八萬五千〇〇六塊
- 一、螟蟲買上金額 八百七十三圓八十九錢六厘
- 一、稻椿象買上高 參十八石五斗五升九合九勺
- 一、同買上金額 九百六十二圓二十一錢四厘
- 一、稻椿象卵塊 九十三萬五千四百八十八塊
- 一、同買上金額 五百五十圓五十一錢五厘
- 一、稻葉捲蟲買上高 九十六萬三千二百五十九本
- 一、同買上金額 百十三圓三十六錢八厘

大正二年度に於ける害蟲の種類、買上數量及金額は左の通りである。

- 一、螟蟲卵塊買上高 六百七十八萬四千八百四十八塊
- 一、同買上代金 一千百三十三圓二十錢五厘
- 一、稻椿象買上高 六十八石二斗四升三合四勺
- 一、同買上代金 一千二百二十六圓三十三錢四厘
- 一、稻椿象卵塊買上高 八十三萬六千〇五十一塊
- 一、同買上代金 百三十九圓六十三錢七厘
- 一、稻葉捲蟲買上高 二萬三千七百九十九本
- 一、同買上代金 七十九錢六厘

右害蟲驅除成績に依つて考へて見ても如何に害蟲驅除に全力を注ぎつゝ、あるかを察せらるゝ次第である。

第十二章 稻の病害、及び豫防驅除法

第一節 病害の種類

茲には佐賀郡に存在する、稲病害の主なる者を掲ぐるに止むるのである。  
壹、**稻熱病** 此病は稻葉の裏面に初め生じ、終に表面に迄で焼き通す者である、而して黒き點々を生ずる者である、今稻熱病の種類を掲ぐれば、

- (一) **苗稻熱病**
- (二) **肥稻熱病**
- (三) **冷稻熱病**
- (四) **頸稻熱病**
- (五) **陸稻熱病**
- (六) **節稻熱病**
- (七) **瘡稻熱病**

(一) **苗稻熱病** は、苗の時代に病氣に罹りたる者をいふので、唯俗言であると見て宜し。

(二) **肥稻熱病** は、苗床にても本田にても肥料の多きに過ぎたる場合に生ずる者である、下水の流れ込む所とか、立小便とか夕立雨の流入する所とかに生ずるのである。

(三) **冷稻熱病** は、山間の冷水掛の所に發生する者にして、稻の不適當の成長の爲に、病菌に取付かるゝのである。

(四) **頸稻熱病** は、穂首稻熱病と、穂先稻熱病との二つに分けるのである、之の病は稻の出穂の頃、東北の冷風に微雨を添へたる場合に起る者である、要するに葉に病菌がありたる者が、雨や露の爲に流れ落ちる時に、恰も好し穂の

若き柔き者があるから、夫に取り付き、病氣を起したる者である。  
(五) **陸稻熱病** は、陸稻に生じたる場合に、名付けたる譯である。

(六) **節稻熱病** は、稻の節が黒色になりたる者であつて、節に發病したる者である、水稻にも陸稻にも起るのである、稻が傾倒するとか倒伏するとかしても、稻の莖節が黒色を帯びざる者は、收穫を得れども、黒色を帯びたる者は、病菌に侵され居る故に、收穫は大に減却せらるる者である。

(七) **瘡稻熱病** は、苗床に生ずる者である、苗床に肥料不足の爲に生ずる者である、本田に於ても、肥料の不足の爲に、山間部にては、發生することがある、苗床の稻熱病が、肥料の不足の爲に起りたる證據には、苗の根が深く土中に入りたる者は、稻熱病に掛らないのは何故なるやと、質議を受くることがある、

此の質議が肥料不足の證據である。

貳葉枯病 此の病菌は、遺傳的に來る者もある、又た傳染的に來る者もある、主として葉に顯はるゝ者である、今其種類を掲ぐれば、

- (一) 胡麻葉枯病
- (二) 斑葉枯病
- (三) 葉尖枯病

(一) 胡麻葉枯病 は、葉に生ずる者であるが、黒き斑點を生じて、葉の表裏に焼き通すことは、葉稻熱病と同様である、夫で素人では一寸區別は出來ない位であるが、強て其區別を云はしむれば、

分類

胡麻葉枯病の斑點は褐色にして小なり  
稻熱病の斑點は黒褐色且楕圓形にして大なり

稻熱病も胡麻葉枯病も、溫暖にして空氣乾燥したる年は少ないけれども、雨年にして冷涼なる年は、發生多き譯である、夫で大正二年及大正三年の病害の少なかりしことも察せらるゝ次第である。

(二) 斑葉枯病 は、白紅屋及び早神力に發生する病氣で、株絶しになるのを見

受るのである、或は一株の内四五本位病氣に罹り、他は健全な場合がある、兎に角、葉に斑葉が出來て終に萎縮し、成長しないのである、或は細小なる糝許りの穂を出すこともある、此の病菌は、胡麻葉枯と兄弟であると云ふことだが、病菌の傳播力弱きところから見れば、兄弟と言つても、大に異なる點がある者と思なければならぬ、麥に斑葉病があるが、麥の斑葉病は初めに葉に生じ、終に黒色となり、麥を枯死せしむるのである、而し之も傳播力は弱い。

(三) 葉尖枯病 は、大風後に發生するか或は、耕土の淺き處に發生する者で、稻の枯死病も此の一種類と見ねばならぬのである、枯死病の如きは、耕土の淺き所又は早水落しの所に發生するのである、殊に神力稻の如き、枯死病に罹るから、恐ろしく、と耕作するのである。

參葉切病 此の病氣は、葉尖が猫の尾を切りたる様に切れる者で、夫で葉切病と云ふ病名の起りたる所以である、葉尖枯病と異なる所は、葉尖枯病は、切れて落ちることはなけれども、此の葉切病は切れて落ちるのである、此の

葉切病の事を俗に白ぼやと云ふのである、白紅屋種及雪カブリ種に最も多い病氣である、此の病菌は、遺傳より來る者である、故に葉尖枯病の害毒より害毒が強いのである、故に葉切病に罹りたる稻は、三割位は收穫減少と見ねばならないのである、親譲りである以上は、病菌の撲滅を本氣になつて遣れば却て、撲滅することが早いのである、即ち障らない神に祟り無しで、病氣のない者を種子とすれば宜しい譯である、夫で此の病は幼少のときより判つて居るから、初めより終り迄病氣の出でない者而已、種子用とせば、終には撲滅することも出来る譯である。

### 第二節 病菌の傳染

病菌の傳染方法も種々ある譯で、今其大要を述べれば左の通りである。

壹、稻草中に於ける傳染 病菌の中にも稻草中に於て傳染する者とせざる者がある、今其大要を示せば、

- (一) 雜草よりの傳染
- (二) 稻草相互間の傳染
- (三) 土壤等よりの傳染

(一) 雜草よりの傳染 は、稻熱病菌の雜草なる、ヘノコロ草及メヒシバ等より傳染する如き者である。

(二) 稻草相互間の傳染 は、稻熱病、葉枯病の如きは稻草相互間に傳染する者である。

(三) 土壤等よりの傳染 之は生物寄生菌は、土壤中には生活出來ざる者なれども水生菌となりて、土壤中に冬眠し、翌年に於て生育傳染せらるゝ者と看做さるべからざる者がある。

貳、種粃よりの傳染 病菌には、生物寄生菌と無生物寄生菌とあるが、稻熱病菌の如きは、生物寄生菌と云ふのであるが、茲に問題がある粃は生物なるや死物なるやと云へば、一寸困るけれども、生物とせずばなるまい、詮ずる所障らぬ神に祟り無しの筆法で、用心が第一である。

### 第三節 病菌の蔓延を助成する素因

病菌の蔓延を助勢する素因を掲ぐれば三つになる。

壹、**稻草不適當の成長** である、稻が肥滿して、柔軟になつても宜しくない、又た瘠せて衰弱しても宜しくない、肥料が多きに過ぎても、不足でも宜しくない、夫れだから、肥料の配合に能く注意しなくてはならぬ。

貳、**氣候** である、千年を好む病氣もある、雨年を好む病氣もある、暖きを好む病氣もあれば、冷涼なるを好む病氣もある。

葉切病の如きは、千年を好む様である、稻熱病の如きは冷涼、濕潤を好む様である。

參、**傷痕** である、傷痕には――

(一) **風害** と―― (二) **蟲害** と二種あるのである。

(一) **風害** は、風の爲に摩擦されて、稻葉の葉縁の排水細胞の如きは、破壊せらるること往々ある者である、夫で此の破壊孔より病菌が侵入する譯である。

(二) **蟲害** は、稻椿象、稻蝗、浮塵子等の害である、椿象も浮塵子も蟬の如き形の者で、其嘴を稻莖に突き込み、養分を吸収するのである、夫で稻莖一本には何

千と云ふ孔が出来て、終に隧道になりて居るのである、夫で浮塵子から吸収せらるゝ稻莖は、綿の如く柔軟になるのである、斯の如く傷害を受けて居るから、夫より病菌が侵入する譯である。

#### 第四節 驅除豫防の方法

壹、**雑草の排除** 右に述べたる如く、雑草に病菌が寄生して居るから、雑草は刈取る而已ならず、大清潔法として、野焼法を行はねばならぬ。

貳、**稻草適當の成長** を爲さしむれば、病害の發生少き譯である、其の適當の成長をなさしむるには

(一) **土質の改良** (二) **肥料の改良** (三) **時々干付ること** 等である。

(一) **土質の改良** は、濕地ならば排水法を執行するのである、粘土ならば砂土を客土とし、砂土ならば粘土を客土とするのである、然すれば、病根を根本的に排除することを得る場合があるのである。

(二) **肥料の改良** 現今の肥料法は、先祖傳來の葉肥而已にして、半ば以上は、加

里及び燐酸に注意を拂はない、夫れだから、莖葉而已成長して割合に收量が少ないのである、斯の如き現況だから、肥料の改良をなして、健全なる稲を作らねばならぬ。

(三) 時々干付くること 水而已常に澤山湛へて置けば、稲が水成長をなして柔かであるから、日成長をさせねばならぬ、然るときは病氣の發生少ない譯である、夫等のことは早魃年には、病害の少きことに依りて證せらるゝのである。

### 參●種子●の●選擇●

- (一) 無●被●害●田●より●採●種●す●る●こ●と● 種子は農家としては最も大切なる者なれば、無被害田を見出して、採種せねばならぬ。
- (二) 選●穂●を●な●す●こ●と● 全くの無被害田は殆んど無き者なれば、勉て選穂をなすが宜しいのである。
- (三) 種●子●の●鹽●水●選●を●な●す●こ●と● 鹽水選をなすときは、輕き者は除くことが出

來るのである。若し病氣があるならば、輕き者にある譯である。

(四) 粒●選●を●な●す●こ●と● 鹽水選をなしても、籾にお鐵漿テツカを着て居るとか、鼠が三番踏て居るとか、詮ずるところ、籾が垢抜けのせない者は、病菌の附着し居る者であるから、斯の如き者は、粒選をなして排除せねばならぬ。

(五) 農●具●よ●り●も●傳●染●す●る●者●な●れ●は●大●に●注●意●す●る●こ●と● 農業も斯くなれば大に進みたるものである、普通の通り稲を抜きて、蓆に干したる者を其儘使用するならば如何に選穂をしても、駄目であるから、折角選穂したならば、普通の農具は遣はないが宜しいと思ふ、夫で僅か許りの事だから、竹片の如き者で籾を落し、而して新聞紙にでも入れて、陰干でも爲したら、安全であると思ふのである。

## 第十三章 佐賀農業の缺點

今迄は佐賀農業の特長を發揮せしむる爲に、大に佐賀農業を賞讚したる點

もあつたのだが、又た一方には、佐賀農業の缺點を指摘して呉れとの注文もある譯である。

世の中には随分反對に出ることがある。特徴と申うて居るのが缺點にもなり、缺點と思ふのが、長所ともなる、之は當座の所より算當を立てるのと、遠大に大改革をなすのに依りて、異なるからの事である、今缺點の條項を掲げて見よう。

- (一) 中稻及び晩稻の二種作をなすこと。或る方面より觀察すれば、二種作は佐賀農業の特徴なれども、種類の雜駁なること、螟蟲の蔓延を助成するに依り漸次、中稻、晩稻の中間なる所謂合の者なる一種に變更せねばならぬ。
- (二) 稻の品種の多きこと。中稻、晩稻の二種作をなすにより夫れによりても、二倍の種類になる譯だが尙ほ中稻が數種に分れ晩稻も然りであるから、不良種類の撲滅を計らねばならぬ。
- (三) 苗代播種量の多きこと。

苗代播種量の減却方獎勵宜しきを得て、大分薄蒔にはなりたる者の、未だ半ばは理想に達せない者がある。

(四) 耕土の淺きこと。深耕も大分注意を拂ふ様になつたのであるが、間には鋤耕法を用ひて夫れ以上耕耨の必要を認めない所もあるけれども、未だ半ば以上は深耕を督勵せねばならぬ。

(五) 春田の存在し居ること。佐賀にてクナタと云ふのであるが、休田地となし置くのである、漸次二毛作をなすの必要がある。

(六) 麥作の栽培方を粗末にすること。雨量の少きところは麥作の本場となるのであるが、佐賀は、本場とは行かないけれども、今一層注意して栽培するときは、生産力は大に増進する資格がある。

(七) 穀類乾燥場の狭きこと。耕作段別が多くて、收量が多きに拘らず、穀類乾燥の庭園が狹隘である、之が乾燥に注意せざる所以にもなるが、亦た一方には充分乾燥して糶摺すれば宜しいのに拘らず、乾燥不充分的儘、糶摺する者



がある、夫で肥前米の聲價を落す譯である。

(七) 堀の内に葭及臺灣水蘭の繁茂して居ること。葭も、臺灣水蘭も、水の流通を妨げ、且つ養分を吸収する而已ならず、泥塵の溜まること少なくなるのである、故に勉めて排除に全力を注かねばならぬ。

(八) 灰を粗末にすること。佐賀の平野には、日々藁を炊きて、薪に代用するので、藁灰は澤山出来るのである、然るに灰小屋なる者は至つて少ないのである、極端に悪しき例を云へば、灰を堀に入れる者もある、雨に曝流されて其儘の者もある、野菜が灰の間から顔を出して居る者もある、斯の如く灰を粗末にする人は、收量を澤山取る人ではない、二三石の收穫組である、五六石の收量を揚げる人は、灰小屋を作りて灰を大切にせねばならぬ。

(九) 飼馬を預託すること。田植後は馬を山間部に五六圓の賃銀を與へて、預託するの習慣があるが、勞力或は蚊及蠅等の關係もあるけれども、食料は潤澤であるし、厩肥も溜まるのだから、馬を預託することは止めることにせず

ばなるまい。

(十) 稻藁を賣却すること。製紙場行の藁が大分あるので、土地の色が益々あせて来るのである、農家も儲かりは米丈に止めて、藁は肥料にする様にせないと、土地の方から掠奪農業は御斷りすると、小言が出ること、思ふのである。

(十一) 畦豆を作ること。畦豆を作りても宜しき所もあろうけれども、畦豆を作りて、害する所が澤山あるから、米を以て豆を買ふ方が得策である。

(十二) 稗の多きこと。稗の根本驅除が行はれないのは、残念の事である、佐賀農業の恥づべき點である。

(十三) 害蟲たる、螟蟲及び稻椿象の多きこと。一方から云へば、害蟲の出來ない様な稻を作つては、收穫はないのである、害蟲の出來る位の稻を作りて、害蟲を撲滅してこそ、大收穫を得る譯である、併し害蟲に全力を注ぎて、驅除に努めて居るが、大分好果を奏したのではあるけれども、未だ根絶と云ふ譯には

行かないのである、將來とても、一分時間たりとも、害虫と云ふ觀念は佐賀農業家は忘却してはならぬ。

(四)窒素肥料多くして加里及び磷酸肥料少きこと 窒素肥料の多きは從來の慣習であるが、夫が爲に、糞を作りて米を取り損じつゝ、あるのもある、夫で大に稲作對施肥方法を改良せねばならぬ。

六石 實收 日本一の稲作法 終

## 附 録

### 第一章 改元 五石懸賞會審査成績

第一回及第二回の五石懸賞會は終了したのであるから、今左に参考のため、審査報告書を掲ぐるのである。

#### 第一節 第一回改元記念五石懸賞會審査報告

本日ヲトシ、佐賀縣農會、五石懸賞會、褒賞授與式ヲ舉行セラル、ニ當リ、茲ニ、調査員一同ヲ代表シ、出品稻田調査ノ概要ヲ報告スルヲ得ルハ、不肖ノ最モ光榮トスルトコロナリ。

抑モ、五石懸賞會ハ、改元記念事業トシテ、今回創メテ施設セラル、モノニシテ其目的トスルトコロ稲作ノ增收ヲ實現シ、以テ、一般農家ヲシテ稲作改善ノ餘地多大ナルヲ自覺セシメ、之カ改良普及ヲ圖ラムトスルニアルヲ以テ、

出品稻田ノ調査方法ニ關シテハ、充分ニ研究ヲ遂ケ、最モ正確ナラシメムコトヲ期シタリ、即チ其出品ハ、各郡水稻競作會審査ノ結果、成績優良ノモノヲ届出シメ、其稻田ハ、一區劃若クハ相連續スル數區劃ノ稻田ヲ以テ、一反歩以上一品種ノモノニ限り、出品稻田全部ニ對スル玄米ノ實收ヲ調査スルモノニシテ、更ニ、稻刈跡地ヲ實測シテ、三百坪ニ付、玄米實收五石以上アリタルモノヲ以テ合格トスルモノナリ、而シテ今回ノ出品ハ、佐賀、神埼、三養基、小城、杵島ノ五郡ニ互リ、總數十一點ニシテ、之カ調査ハ、稻刈ヨリ乾燥調製ニ至ル迄、調査員始終監督シ、又夜間ニアリテハ、調査資料ハ悉ク倉庫ニ密閉スルノ方法ニ依リ、尙ホ誤謬ナカラシメム爲メ、生粳、乾粳及玄米ハ其重量容量共ニ一々之ヲ秤量シタレハ其手數頗ル繁雜、且ツ作業亦困難ナリシト雖モ調査員諸氏ノ熱心、能ク嚴密周到ヲ旨トシ、之ニ從事セラレタルヲ以テ、些ノ遺漏ナカルヘキハ深ク信スル所ナリ、而シテ其結果ニ依リ、今其合格田ヲ舉クレハ、

一、佐賀郡、高木瀬村、永淵清次郎出品稻田、一反二畝二十三歩四合五勺、晚稻西

ノ宮種、一反歩、玄米收量五石五斗九升三合九勺。

一、佐賀郡、北川副村、山口秀一出品稻田、一反二畝二十一步一合、晚稻西ノ宮種、

一反歩、玄米收量五石五斗四升八合八勺。

一、小城郡、三日月村、立物青年會出品稻田、一反一畝十八歩四合、晚稻西ノ宮種、

一反歩、玄米收量五石四斗二升三合八勺。

一、杵島郡、六角村、大串竹三郎出品稻田、一反二十八歩六合八勺、晚稻神力種、一

反歩玄米收量五石三斗五升九合。

一、佐賀郡、久保田村、古賀房吉出品稻田、一反三畝五歩、晚稻西ノ宮種、一反歩玄米收量五石一斗一升。

一、佐賀郡、高木瀬村、宮地次郎出品稻田、一反二畝十五歩、早稻白紅屋種一反歩玄米收量五石四合六勺。

ノ六點ニシテ、殊ニ收穫米ノ品質ニ就テハ、懸賞規程ニ基キ、肥前米麥輸出同業組合役員ノ臨檢ヲ請ヒ、何レモ輸 Outcome 米四等ニ相當スルノ鑑定ヲ經タリ。

以上ノ結果ニ依リ、之ヲ觀レバ、今回ノ出品ハ、漸ク十一點ニ過ギズト雖モ合格田ハ其半バ以上ヲ占メ又合格以外ノ出品ニアリテモ一反歩玄米收量四石ヲ下ラス、而シテ之ヲ今期縣下稻作平均收量二石五斗内外ニ比スルトキハ、一反歩ニ付、二石五斗乃至三石一斗ノ增收ヲ遂ゲ、優良ノ成績ヲ示シタルハ、之レ一ニ出品者諸氏ノ率先、稻作ノ改良ニ努メラレタル效果ナラズンバアラズ、然ルニ、人動モスレバ、合格田ノ實現ハ、之ヲ今期稻作上ニ於ケル天候ノ適順ナリシニ歸シ、殆ンド他ヲ顧ミルナキモノアルハ、甚ダ遺憾トスル所ナリ、天候ノ恩惠、多大ナリシハ素ヨリ否ムヘカラサルモ、出品稻田ハ、普通稻田ニ比シ、其位置、土質、少シモ優越シタルモノナシ、然シテ能ク以上ノ增收ヲ得タルハ、之レ適順ナル天候ヲ利用シテ、充分人爲ヲ發揮シタル、所謂改良ノ效果ナリト斷言スルモ敢テ過言ニアラザルベシ、希クハ、當業者諸氏、宜シク此ノ增收ニ鑑ミ、斯業ノ改良ニ資益シ、以テ、本會開催ノ趣旨ヲ徹底セシメラレムコトヲ、以上調査ノ概要ヲ敍シ、併セテ一言當業者ノ奮勵ヲ望ム所以ナリ。

大正三年一月七日

## 第二節 第二回改元記念五石懸賞會審査報告

佐賀縣農會、改元記念五石懸賞會褒賞授與式を挙げらるゝに當り、審査の概要を報告するを得るは不肖の最も光榮とする所也。

抑々、本會の目的は、稻作の增收に實現し、一般農家をして、稻作改善の餘地多大なるを自覺せしめ、之れが改良普及を圖るにありて、今回を以て其第二回とす、前回は一段歩五石以上のもの六點を出し、其最も優良なるものは、五石五斗九升餘に達したり、然るに、今回は、五石以上の合格田中、更に六石以上の特別賞を設け、益々多收の實を上げん事を期せり、而して、出品は、前回に同じく、一品種、一段歩以上とし、各郡水稻品評會に於て、其成績優良なるものに就き選抜したるものにして、佐賀郡五點、小城郡三點、計八點の出品を得たり、而して、之れが審査は最も嚴密に、出品稻田全部の玄米收量を調査すると共に、

段別を實測し、一段歩に換算せり、即ち、玄米收量調査に當りては、稻刈より乾燥調製に至る迄を、審査監督の下に、之を行ひ、夜間は倉庫内に密閉し、之れが出入に際しては、毎に重量を秤りたるのみならず、生粳乾燥の重量を秤量して、些スコソの誤謬なからしめ、段別の測量は、正確にして統一を期せんがため、縣耕地整理係に依頼し、同一技術者をして、之を實測せしめ、米質の鑑定に就ては、規程に基き、肥前米麥輸出同業組合役員の臨檢を求め、何れも、四等以上の輸出米に合格せり、今合格田の成績を擧ぐれば、

一、佐賀郡、東興賀村、高園岩吉、出品稻田、一段四畝二十歩九勺、晚稻西の宮種、一段歩の玄米收量六石六升三勺、

一、佐賀郡、久保田村、中副青年會、出品稻田一段四畝九歩二勺、晚稻西の宮種、一段歩玄米收量五石五斗二升六合五勺、

一、佐賀郡、中川副村、山田伊三郎、出品稻田、一段十三歩八合、晚稻西の宮種、一段歩玄米收量五石三斗八升五合三勺、

一、佐賀郡、高木瀬村、永淵清次郎、出品稻田、一段二十二歩九合三勺、晚稻西の宮種、一段歩玄米收量五石三斗一升七合五勺、

一、佐賀郡、本庄村、田中源地、出品稻田、一段九畝四歩二合九勺、晚稻西の宮種、一段歩玄米收量五石三斗九合二勺、

以上の成績により、之れを觀れば、本年の稲作は、早害、風雨、交々至り、天候順を得ざりしに拘らず、八點の出品中、五點の合格田を出し、其最高收量は、六石六升餘にして、最低收量尙五石三斗を下らざるのみならず、前回の合格者にして、今回も亦合格せるものあるを以て見れば、栽培法の改善により、稻作増收の確實なるを證するに足るべく、從來米作の豊凶年毎に同しからず、人爲は遂に、天候に左右さるゝとなすの時に當り、茲に至大の覺醒を與へたりと謂ふべきなり、然るに、人、動もすれば、今回の合格田が、佐賀郡の一部に限られたるを見て、増收の原因を風土の良好なるに歸し、殆んど他を顧みざるものあるは、甚だ遺憾とする所なり、然れども、之を仔細に觀察すれば、敢て風土の特

に卓越したるにあらざ、克く天然に適應し、耕種、肥培に、技術の精巧を凝らしたる結果にして、全く當業者の卓越せる改良法を施したる、效果に外ならざるを信ず。

希くば、當業者諸氏、今回の成績に鑑み、益々斯業の發展に努力し、本會の目的に問はれん事を、以上審査の概要を敍し、併せて當業者の反省を促す所以なり。

大正四年二月十一日

## 第二章 大正二年度五石懸賞合格

### 稻田耕種方法

五石懸賞に合格したる稻田は佐賀、小城、杵島の三郡に互り各地、氣候、土質、及農業經營の方法同じからず、従て、耕作の方法も自然相異の點尠からざるも、今綜合的に其概要を摘記すれば左の如し。

- 一、**稲品種** 品種は早稲白紅屋種一點、晚稻神力種一點、同西ノ宮種四點なり、而して白紅屋種は本縣作付反別七千餘町歩にして早稻作付反別の大部分を占め、神力種は作付反別二萬五千町歩に互り共に收穫多く米質良好にして久しく栽培しつゝ、ある品種なり、西ノ宮種は本縣平坦部氣候溫暖なる地方に於て近年作付を初め栽培容易に且つ收穫多きを以て年々作付反別を増加しつゝ、あり
- 二、**種子精選** 種子は無病健全、結實良好なる稻田に就き先づ穗選を行ひ、穗の中部より先きを扱落し、箕を以て充分に糝、蘆芥等を去り、貯藏の後鹽水選

を行ふ。

三、浸種 浸種は桶浸のもの四點、苞浸のもの二點にして、桶浸は毎日水を取換へ、浸種日數五日乃至六日、苞浸は浸種日數七日乃至十日間なり。

四、苗代 山口秀一、宮地次郎、立物青年會は共同苗代にして其他は個人苗代をなし近年何れも苗代の改善を圖りつゝあり其施業の概要左の如し。

(イ) 整地 永淵清次郎、山口秀一のものは前作として莖臺を作付け、其他は休閒田にして冬季又は早春に耕起し、莖臺跡地にありては其根株を抜取り共に勸返し、後灌水して叮嚀に馬耙を行ひ、然る後徐々に排水して稻株拾ひをなし、直に四尺巾の短冊形に床を作り、地均をなし、後、二日間床面を日光に曝す。

(ロ) 肥料 苗代一畝歩に對する施肥量及施用方法左の如し。

合格者別	人糞尿	石過磷酸灰	肥配合	藁灰	乾鰯	施用方法
永淵清次郎	三貫	一貫	〇貫	一、六石	〇石	人糞尿は灌水前に施し、整地後過磷酸灰を撒布し、又苗の一寸位を播下し、其上より藁灰を撒布し、人糞尿は灌水前に施し、配合肥料及藁灰を床均るとき藁灰少量を施用す。二寸位に、のびたるとき肥料及藁灰とも苗の寸餘に成長したるとき施用す。
山口秀一	四	〇	一	三	〇	人糞尿、藁灰、乾鰯は整地の際に施し、稀釋人糞尿少量を播種後二十日頃施用す。
立物青年會	〇	〇	一	三	〇	人糞尿、過磷酸石灰は代播のとき藁灰は播種後撒布す。
大串竹三郎	七	〇	〇	五	一、五	人糞尿は塊返の際に配合肥料は代播前に施し、藁灰は播種後四回に撒布す。
古賀房吉	五	一	〇	九	〇	
宮地次郎	一五	〇	一	一、五	〇	

備考 過磷酸石灰は可溶磷酸一五%のもの、又配合肥料は可溶磷酸一、%のもの、アンモニア性窒素は五、%ものなり。

(ハ) 播種 播種は何れも厚薄なき様叮嚀を旨とし、共同苗代にありては、組合員中最も播種に巧みなるものを選び之れを行ひ、又、永淵清次郎は俗にカラ播として灌水せずして播種したり、播種量は播床一坪に付、二合播の量の三點、四合播一點、五合播一點、七合播一點にして、何れも、其地方普通播種量に比して薄播をなしたるものなり。

〔附記〕大串竹三郎苗代七合播のものは、播種後降雨多く、浮泥を被ひり、發芽悪しかりしも、其後の生育は良好にして、殊に早播きなるを以て、薄播に等しき健全なる苗を得たり。

(二)用水灌排 播種後、二三日間は浅水を湛へ、其後一週間乃至十日間許りは、毎日又は隔日に晝間五六時間づゝ排水、所謂芽乾を行ひ、又、苗の寸餘に成長したる後は、浅水とし、自然減水するに任せ、凡そ三四日目位に、數時間づゝ乾付け、尙ほ多量の藁灰を施して、雜草の繁茂を防ぎ、苗拔を容易ならしむると共に、苗をして強健に仕立るを旨とせり。

(ホ)除草及病蟲害驅除豫防 苗の三寸位に伸長したる頃より、二三回雜草拔取をなし、又、螟卵採取をなすこと三回なり而して、此の外、山口秀一、大串竹三郎、宮地次郎苗代は、移植前各一回づゝ、浮塵子驅除を行ふ、而して又、宮地次郎苗代に於ては、移植凡そ二週間前、稻熱病豫防の爲め、四斗式糖化ボルドー液を一畝歩に付四升の割を以て撒布せり。

### 五、本田の土質

土質は何れも第四紀新層に屬し、壤土又は埴土なり、耕土の深さは四寸及び四寸五分のもの各一點、六寸五分及七寸のもの各二點にして、深耕の必要なるを認め、犁を改め、或は二段耨の方法等に依り、漸次深耕をなしつゝあり。

六、前作及び本田整地 「永淵清次郎」前作物は小麥にして六月二十三日、麥作跡地を耨返し、直に灌水、同廿六日中耨、同廿八日縦横三回に馬耙を行ひ、植代となす。

「山口秀一」前作物は小麥にして、六月八日麥作跡地を耨返し、同十日灌水、馬耙二回施行、後、中耨をなし、尙ほ馬耙を行ふこと二回にして、植代となす。

「立物青年會」前作物は小麥にして、六月二十二日麥作跡地を耨返し、同廿四日灌水、同廿六日馬耙二回施行、七月一日馬耙三回を行ひ、植代となす。

「大串竹三郎」前作に蠶豆を作付け、其跡地、畦の上部を鋤にて打返したる土塊を刻み、植付、約十日前、畦の上部及兩測を切り崩し、植付前日、畦の心土を打起



し、植付當日に至り、鋤にて土塊を細めつゝ、地均しを行ふ、當地方は深田にして牛馬耕をなさず、作業は總て鋤を用ふ。

〔古賀房吉〕前作物は小麦にして六月十五日麥作跡地を鋤返し同十七日灌水、夫より馬耙を行ふ事二回、次に、中鋤をなし、其後馬耙三回にして植代となす。

〔宮地次郎〕前作物は裸麥にして、五月三十日麥作跡地を鋤返し、六月一日灌水、同二日中鋤、同四日縦横三回馬耙を行ふ。

七、插秧 插秧株間の距離、及、一株苗數は、別表〔調査表〕記載の通りにして、何れも町噺に施行せり。

八、肥料 本田一反歩に付施用したる肥料は、別表記載の如くなるが、今、合格者別に、其施用方法を記せば左の如し。

〔永淵清次郎〕元肥として麥作跡地鋤返しに際し、青刈大豆を鋤込み、堆肥を其上に撒布し、骨粉は菜種油粕と混合し灌水前に、又人糞尿は荒搔〔馬耙〕の時施用す、追肥には、先づ大豆粕を粉碎したるものを木灰と混し、七月廿一日一番除

草の際に、精過磷酸は、人糞尿に加へ、七月十七日、二番除草のとき、又、硫酸加里は、乾土と混じり、八月八日施用す、而して、此の外鹽化滿俺を堆肥に混じたるものを八月廿二日施用せり。

山口秀一〔元肥として先づ骨粉を撒布したる後、麥畦を鋤返し、練粕、及、人糞尿は鋤返後施用し、石灰は灌水後使用す、追肥は、乾鰯を七月十五日一番除草の際に、五號配合肥料は、土用入一日前に、人糞尿は土用サメ後直に施用し、藁灰は插秧後數回に撒布したり。〕

〔立物青年會〕元肥として、麥刈跡地に青刈大豆、及、精過磷酸を施して鋤返し、灌水後、大豆粕及藁灰を施用す、追肥には、七月十四日二番除草のとき、大豆粕五貫匁、精過磷酸二貫五百匁、及、藁灰を、尙ほ八月一日三番除草のとき、大豆粕五貫匁、精過磷酸二貫五百匁を施用したり。

〔大串竹三郎〕元肥として前年秋季、蠶豆作をなしたる畦間に藁を撒布し、堆肥は前作跡地、打返の際に施用す、追肥には、乾鰯を二番除草のとき、過磷酸石灰

を三番除草のとき排水して施用したり。

「古賀房吉」元肥として青刈大豆、大豆粕、硫酸加里を植付十日前荒搔きの際に、精過燐酸は移植前日代搔の際施用す、追肥には八月十日三番除草に際し、排水して木灰、練粕及配合肥料五貫匁を、又、八月廿五日配合肥料四貫匁を施用したり。

「宮地次郎」元肥として青刈大豆、及堆肥を五月三十日麥刈跡地に撒布し、直に糶込み、乾糞及人糞尿は、六月四日代搔前に施用し、追肥には、六月廿四日人糞尿八十貫匁を施用し、七月二日乾糞と精過燐酸と混じたるもの、及、人糞尿八十貫匁を施用す、而して、藁灰は植付後數回に撒布したり。

九、除草 除草の時期及方法を表示すれば左の如し。

一番除草	永淵清次郎	山口秀一	立物青年會	大串竹三郎	古賀房吉	宮地次郎
七月十一日雁爪打	七月十四日雁爪打	七月十四日雁爪打	七月三日鎌にて株間打起し	七月十七日雁爪打	六月廿四日雁爪打	

二番除草	七月十七日手取	七月十七日太一車使用	七月廿日手取	七月四日手にて地均しなす	以後二回除草す而して普通三回施行するもの早	七月一日手取
三番除草	七月三十日手取	七月二十九日手取	八月一日手取	七月十六日手取	魁の爲め灌水(水車)に忙殺され二回以上施行する能はざりしものなり	七月十五日手取
四番除草	八月十二日手取	八月十一日手取	八月十四日手取	七月廿七日手取		八月一日手取
五番除草		八月廿三日手取				

十、用水の灌排

用水は、永淵清次郎、宮地次郎、立物青年會稻田は自然灌水に依り、山口秀一、古賀房吉、大串竹三郎稻田は、水車を以て灌漑す而して、近年何れも用水を深く湛ふるの有害なるを認め、常に、淺水を旨とし、又、除草若くは施肥後等に於て、二三日間乾付け、穂孕より落花迄は、絶えず灌水し、穂先傾き黄變するに至り、全く排水したり、殊に、山口秀一の稻田は、心土滲透力強く、夏季晴天連続のときに際し、屢々灌水するも始終乾付き、又、大串竹三郎稻田は、早魃の爲め、用水堀、涸渴せし故、井水を以て、之れを補ひ、漸く早害なきを得たり。



追肥	肥料成分		肥料加里	一歩施用額	肥料金	一株ノ穂數	穂ノ長サ	一穂ノ粒數	米	
	窒素	磷酸							生米一升重量	乾米一升重量
精過燐酸 二、五〇〇 木灰 六、〇〇〇 硫酸加里 一、〇〇〇 鹽化マンガン 一、五〇〇	人糞尿 一〇〇、〇〇〇 乾鹽 六、〇〇〇 配合肥料 一〇、〇〇〇 藥灰 二五、〇〇〇	精過燐酸 五、〇〇〇 過燐酸 七、〇〇〇 配合肥料 九、〇〇〇 乾鹽 六、〇〇〇	三、八六八 三、七八三 四、〇〇〇	二 三 四	十 廿 廿三	本 圓十 本 二十七本一合廿 本 廿八本五合十五本二合廿	三 三 三	二 三 三	三、八四七 三、七六八 三、八〇〇	三、八二一 三、七四二 三、七七五
精過燐酸 二、五〇〇 木灰 六、〇〇〇 硫酸加里 一、〇〇〇 鹽化マンガン 一、五〇〇	人糞尿 一〇〇、〇〇〇 乾鹽 六、〇〇〇 配合肥料 一〇、〇〇〇 藥灰 二五、〇〇〇	精過燐酸 五、〇〇〇 過燐酸 七、〇〇〇 配合肥料 九、〇〇〇 乾鹽 六、〇〇〇	三、八六八 三、七八三 四、〇〇〇	二 三 四	十 廿 廿三	本 圓十 本 二十七本一合廿 本 廿八本五合十五本二合廿	三 三 三	二 三 三	三、八四七 三、七六八 三、八〇〇	三、八二一 三、七四二 三、七七五
精過燐酸 二、五〇〇 木灰 六、〇〇〇 硫酸加里 一、〇〇〇 鹽化マンガン 一、五〇〇	人糞尿 一〇〇、〇〇〇 乾鹽 六、〇〇〇 配合肥料 一〇、〇〇〇 藥灰 二五、〇〇〇	精過燐酸 五、〇〇〇 過燐酸 七、〇〇〇 配合肥料 九、〇〇〇 乾鹽 六、〇〇〇	三、八六八 三、七八三 四、〇〇〇	二 三 四	十 廿 廿三	本 圓十 本 二十七本一合廿 本 廿八本五合十五本二合廿	三 三 三	二 三 三	三、八四七 三、七六八 三、八〇〇	三、八二一 三、七四二 三、七七五
精過燐酸 二、五〇〇 木灰 六、〇〇〇 硫酸加里 一、〇〇〇 鹽化マンガン 一、五〇〇	人糞尿 一〇〇、〇〇〇 乾鹽 六、〇〇〇 配合肥料 一〇、〇〇〇 藥灰 二五、〇〇〇	精過燐酸 五、〇〇〇 過燐酸 七、〇〇〇 配合肥料 九、〇〇〇 乾鹽 六、〇〇〇	三、八六八 三、七八三 四、〇〇〇	二 三 四	十 廿 廿三	本 圓十 本 二十七本一合廿 本 廿八本五合十五本二合廿	三 三 三	二 三 三	三、八四七 三、七六八 三、八〇〇	三、八二一 三、七四二 三、七七五

備考	一歩當生米容量	一歩當乾米容量	一歩當生米重量	一歩當乾米重量	一歩當生米容量	一歩當乾米容量	一歩當生米重量	一歩當乾米重量
一、收量ハ出品稻田全部ニ就キ調査シタルモノナリ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一、一株稻穂數ハ百株ヲ調査シ平均シタルモノナリ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一、穂ノ長サハ平均穂數アル一株各穂ノ長サヲ調査シ平均シタルモノナリ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一、一穂粒數ハ平均穂數アル一株ノ全部ヲ調査シ平均シタルモノナリ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一、藥ノ長サハ刈取部ヨリ穂先キマテ示シタルモノニシテ廿株ヲ調査シテ平均シタルモノナリ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一、一歩施用肥料金額中ニハ自家ニテ生産シタル藥、青刈大豆、堆肥等ヲ算入セズ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一、石灰及鹽化マンガンハ便宜肥料欄ニ記載セリ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

### 第三章 大正三年度五石懸賞合格田耕種方法

#### 第一項 高園岩吉君稻作耕種梗概(段當六石六升三勺)

- 一、稻の品種及系統 西の宮種にて、一昨年川副郷より交換し來りたり。
- 二、種子の選擇 昨年度に於て拔穂したる者を、本年に至り比重一、一二を有する鹽水にて精選せり。

三、浸種日數及其方法 五日間にて桶浸、而して毎日水を取り換へたり

四、苗代地の耕耨時期並に方法及整地方法 個人苗代にて、整地は休閑田を早春、除草を行ひ、深さ二寸五分に耕起し、其根株を拔取り、更に耨返し、灌水と共に馬糞にて代掻をなし、而て畦畔の整理を行ひ、一尺溝を有する四尺幅の短冊形の畦を造り、地均し後、半日位日光に曝す

五、肥料名、數量、施用の時期方法(一畝歩) 下肥四貫、過磷酸石灰一貫五百匁、葉灰九斗、而して下肥は灌水前に施し、整地後、過磷酸石灰を與へ、播種後、葉灰を撤布す

六、苗代播種月日、播種量、播種方法 播種は五月二十六日にして、一坪二合五勺を播種し、空播(水無)をなしたり。

七、苗代用水の灌排、除草、病蟲害の豫防、驅除 播種後、大風雨、又は蛙の害に罹らざる限りは、成るべく淺水(俗に手叩き水)とし、而して苗の一二寸に成長したる時は、隔日、晝間五時間位は落水して、日光の照射、空氣の流通を計り、以て

强健、剛短なる苗を仕立つるに務めたり。

除草は、播種後十日目にして一回、後ち七日目にして一回、都合二回、雜草、及、苗の軟弱なるものを間引きしたり。

病蟲害の豫防、驅除法としては、螟卵採取を四回行ひ、移植前一回、浮塵子、其他害蟲驅除の爲め、害蟲全滅器を用ひて之れが驅除に努めたり。

八、本田の土質、耕土の深さ及心土の状態 第四紀新層に屬したる埴土にして深さ六寸あり。

九、前作物及整地の方法 蠶豆にして六月二十日、跡地を耨返し、直ちに灌水し、二十七日、中耨二十八日、縦横三回の馬糞を行ひ、植代とす。

十、插秧月日、插秧の距離、一坪の株數、一株の苗數 插秧は七月二日、插秧の距離は八寸平方にして五十六株、一株の苗數は一本乃至二本位なり。

十一、施用したる肥料の名稱、數量、施肥期及其方法(一段歩)

肥料名	總量	元肥	追肥			單價	總額
			第一回	第二回	第三回		
堆肥	一五〇,〇〇〇 <small>タ</small>	一五〇,〇〇〇 <small>タ</small>				〇,〇〇五	〇,七五〇
藁灰	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇				〇,〇一〇	〇,一〇〇
骨粉	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇				〇,二五〇	二,五〇〇
硫酸加里	一〇,〇〇〇	五,〇〇〇	五,〇〇〇			〇,四〇〇	四,〇〇〇
菜種油粕	二〇,〇〇〇	一五,〇〇〇	五,〇〇〇			〇,二四五	四,九〇〇
乾鰯	五,〇〇〇	五,〇〇〇				〇,六〇〇	三,〇〇〇
過磷酸石灰	三,〇〇〇			三,〇〇〇		〇,二四	一,四八八
計							一六,七三六

元肥は蠶豆跡地に堆肥、藁灰、骨粉、乾鰯を撒布し、耨返し後、油粕、加里を施用し、第一回除草の際、硫酸加里、油粕、第二回除草の際、過磷酸石灰を施用す。

十二、除草の時期、回数、方法、稗拔の施行

- 一番除草、七月十五日(太一車)
- 二番除草、七月二十一日(太一車)
- 三番除草、八月三日(手取)
- 四番除草、八月十五日(手取)

十三、用水の灌漑

除草後は一日間干付け、穂朶より落花期迄は、絶えず灌水し、穂先傾く頃落水したり、稗は除草の際見當り次第除去し、出穂後は凡て焼却する事に努めたり。

十四、病虫害の豫防驅除

螟卵發生期は、極力採卵に努め、多少、稻椿象の發生を認めしにより、産卵前一々之を捕殺せり、稻熱病、其他病害豫防としては種子の系統、精選に重きを置き、加里、磷酸分の補給を充分にし、稻莖を強健ならしむる事に努めたり。

十五、耕種上に就き、其地方、普通方法と比較し、相異の點あらば、其事實又は之に關し、特に改善を加へたる點。

- (一) 本田は一般、深耕なるに加ふるに、昨年來深耕をなしたる爲め、元肥の含蓄力大なりし事。
- (二) 薄蒔、殊に間引を行ひ、苗を強健ならしめたるによること。
- (三) 磷酸、加里質の肥料を多量に施し、莖及結實の剛直、充實を計りしこと。

十六、本田の所在地、臺帳面積、佐賀郡東興賀村大字下古賀字實久六百四十二番第一、臺帳面積、貳段貳畝九步。  
 十七、本田の公定地價等級及賣買價額、公定地價、百三十五圓十九錢、等級乙八等、賣買價格五百七拾圓。  
 十八、耕作者、農業狀態の大要及其の他參考となるべきもの、耕作者は兼て農業熱心にて、其部落、地方の割合に農事に冷淡なるを憤慨しつゝ、數年來より決斷して、苗代改良、土地深耕、肥料の配合等に熱注しつゝ、ありし者なり。  
 十九、稻作一段歩收支概算、一段歩收支計算

收入之部

種別	數量	單價	價格	摘要
種別	數量	單價	價格	摘要
玄米	六、〇六〇三 <small>石</small>	〇、一一〇	六六、六九三 <small>圓</small>	
屑米	〇、〇二一	〇、〇五五	〇、一一五	
葉	九八 <small>把</small>	〇、〇二五	二、四五〇	

支出之部

種別	金額	摘要
種別	金額	摘要
穀	四〇 <small>圓</small>	〇、〇一五
計		六九、八五八

種別	金額	摘要
種子代	〇、三〇〇 <small>圓</small>	種子三升代一升到付十錢
肥料代	一六、七三八	男二十二人一合 一人五十錢 馬五日 一日五十錢 女十一人五合 一人三十錢
人夫賃	一七、〇〇〇	
農具損料	〇、五〇〇	
公租其他	四、五四一	地租二圓八十四錢五厘、縣稅八十九錢六厘、町村費五十九錢七厘、水利組合費十一錢三厘、農會費九錢
協議費	〇、〇九九	
雜費		
計	三九、一七八	

二十、稻作一段歩所要人夫及賃銀

米作一段歩に對する人夫賃(男女別)

區別	人員	單價	總額	摘要
苗代整地其他一	男 一、八	〇、五〇〇	〇、五〇〇	
切畦畔塗	男 〇、五	〇、〇〇〇	〇、二五〇	
塊起	男 二、〇	〇、〇〇〇	一、〇〇〇	
塊返	男 一、〇	〇、〇〇〇	〇、五〇〇	
荒搔	同 〇、四	〇、〇〇〇	〇、二〇〇	
中搔	同 〇、四	〇、〇〇〇	〇、二〇〇	
代搔	同 〇、三	〇、〇〇〇	〇、一五〇	
苗拔及移	男 二、〇 女 二、〇	〇、〇〇〇	一、〇〇〇	
除草	男 一、五 女 一、五	〇、〇〇〇	〇、七五〇	
施肥	男 四、〇 女 四、〇	〇、〇〇〇	二、〇〇〇	
管蟲驅	女 四、〇	〇、〇〇〇	一、二〇〇	
刈積	男 二、〇 女 二、〇	〇、〇〇〇	〇、四〇〇	
小落	男 二、五	〇、〇〇〇	一、二五〇	
乾拔	女 一、〇	〇、〇〇〇	〇、三〇〇	

其計	他製
男 三、五	〇、五〇〇
女 二、一	〇、三〇〇
男 一、七五〇	一、七五〇
女 一、四、五〇〇	一、四、五〇〇

第二項 山田伊三郎君、稻作耕種梗概（段當五石三斗八升五合三勺）

一、稻の品種及系統 西の宮種にして佐賀縣立農業試驗場より取り寄せたるもの。

二、種子の選擇 比重一、一二を有する鹽水にて選種せり。

三、浸種日數及其方法 五日間にして桶浸し、而して毎日水を取り換へたり

四、苗代地の耕耨時期並に方法及整地の方法 個人苗代にして、整地は休閑

田を、早春除草を行ひたる後、深さ二寸五分に耕起し、其根株を拔取り、更に耨

起し、灌水と共に馬耙を行ひ、而して後畦畔の整理を行ひ、一尺溝を有する

四尺幅短冊形の畦を造り、後一日間日光に曝す。

五、苗代肥料の名稱、數量及施肥期と其方法（一畝歩） 下肥二貫五百匁、過磷酸



石灰九百匁、藁灰五斗、而して下肥は灌水前に施し、整地後、過燐酸石灰を與へたる後、地均をなし、播種後藁灰を撒布したり。

六、苗代播種月日、播種量、播種の方法。播種は五月十五日、播種量は坪二合五勺、播種の方法としては揚げ蒔、尙ほ空蒔をなしたり。

七、苗代用水の灌排除、草病蟲害の豫防驅除。灌漑水は、引き水にして、大風雨又は蛙の害に罹らざる限りは成るべく淺水とす。

除草は間引と同時に、六月五日及十日の兩日に行ひたり、而して螟卵採取は三回之を行ひ、浮塵子、其他害蟲驅除のため一回注油驅除をなしたり。

八、本田の土質、耕土の深さ及心土の状態。土質は第四紀新層に屬したる埴土なり、而して本田は埋立新地なれば、底なしの田地なり。

九、前作物及整地の方法。小麥にして六月二十五日麥跡地を耨返し、二段耨をなし、耕土七寸、直に灌水、二十六日中耨を入れ、二十八日縦横三回、馬耕を行ひ植代とす。

十、插秧月日、距離、一坪株數、一株苗數。插秧は六月二十八日、距離は八寸平方、一坪五十六株、一株の苗數は一本乃至二本植とす。

十一、施用したる肥料名稱、數量、施肥期及其方法。

肥料名稱	總量	元肥	堆肥			價格	
			第一回	第二回	第三回	單價	總額
堆肥	200,000	200,000				0,005	1,000
藁灰	110,000	110,000				0,010	0,110
骨粉	5,000	5,000				0,250	1,250
干鰯	8,000	8,000				0,700	5,600
人造肥料五號	9,000	5,000			4,000	0,240	2,160
鱈	4,000		4,000			0,500	1,700
鱒	4,000			4,000		0,400	1,600
硫酸加里	4,000			4,000		0,400	1,600
鹽化滿俺	1,500				1,500	0,355	0,535
計							14,335

元肥は、麥跡地に、堆肥、藁灰、骨粉を撒布し、耨返し、灌水後、干鰯、人造肥料の五

號を施用し、追肥第一回は七月十日の一番除草の際に第二回は七月十八日二番除草の際に、第三回は八月一日、三番除草の際に施用したり。

十二、除草の時期、回数、方法、稗拔の施行

一番除草は七月十日(雁爪) 二番除草は七月十八日(手取)

三番除草は八月一日(手取) 四番除草は八月十五日(手取)

稗は除草の際、見當り次第除去し、出穂後は凡て焼却することに努めたり。

十三、用水の灌漑 引水の處にして用水の灌漑便利なるを以て、晝間は減水

夜間は、灌水、三番除草の際、龜裂する程、干付くること二回、穂孕期より落花期

迄は充分灌水、穂先傾き、黄變の頃全く排水したり。

十四、病虫害の豫防、驅除 螟卵採取四回、浮塵子豫防として注油二回を施す

十五、耕種上に付き、其地方の普通方法と比較し、相異の點 あらば、其事實又

は之に關し、特に改善を加へたる點等。

(一) 埋立新地にして底なしの田地なれば土地深耕に便なること。

(二) 其地方に比し、苗の薄蒔をなしたり、而して殊に二回に渡り間引きしたること。

(三) 磷酸及び加里質を多量に施したること。

(四) 堆肥を施したること。

十六、本田の所在地、臺帳、面積 佐賀郡中川副村大字早津江字三本松五の角千八百十七番地

一、田貳段二畝二十四歩。

十七、本田の公定地價、等級及賣買價格 公定地價は百四十三圓四十三錢五厘、等級は八等、賣買價額五百五十圓也。

十八、耕作者、農業状態の大要、及其他參考となるべきもの 同人は其の地方青年會長なり、殊に地主として數年前より銳意稻作改良に苦心研究せられたり。

十九、稻作一段歩收支概算 一段歩收支計算

収入之部

種別	數量	單價	價格	摘要
種別	數量	單價	價格	摘要
玄米	五、三八五 <sup>石</sup>	〇、一一〇	五九、二三五	
屑米	〇、〇一二	〇、〇五五	〇、〇六六	
藁	九 <sup>把</sup>	〇、〇二五	二、三〇〇	
籾	三〇 <sup>貫</sup>	〇、〇一五	〇、四五〇	
計			六二、〇五一	

支出之部

種別	金額	摘要
種子	〇、三〇〇	種子三升代一升十錢
肥料	一四、三三五	
人夫賃	一五、五〇〇	男二十人 一人五十錢 女十人 一人三十錢
農具損料	〇、五〇〇	
公租其他	四、四六五	地租二圓五十九錢五厘、縣稅八十錢五厘、町村費五十四錢五厘、水利組合費四十二錢五厘、農會費九錢五厘
雜費	〇、〇七五	
計	三四、八七五	

二十、稻作一段歩所要人夫及賃金

米作一段歩に對する人夫賃(男女別)

區別	人員	單價	總額	摘要
苗代整地其他一切	男 一、八〇〇	〇、五〇〇	〇、五〇〇	
本田畦畔塗	男 〇、五〇〇	〇、五〇〇	〇、二五〇	
塊起	男 二、〇〇〇	〇、五〇〇	一、〇〇〇	
塊返	男 一、〇〇〇	〇、五〇〇	〇、五〇〇	
荒搔	男 〇、三五五	〇、五〇〇	〇、一七五	
中耙	男 〇、三五五	〇、五〇〇	〇、一七五	
代搔	男 〇、三五五	〇、五〇〇	〇、一七五	
苗拔及移	男 一、〇〇〇 女 二、〇〇〇	〇、五〇〇	〇、一〇〇 一、〇〇〇	
除肥	男 一、〇〇〇 女 二、〇〇〇	〇、五〇〇	〇、一〇〇 一、〇〇〇	
施肥	男 一、〇〇〇 女 二、〇〇〇	〇、五〇〇	〇、一〇〇 一、〇〇〇	
計			〇、五〇〇	

附錄

計	管 理		害 蟲		刈 取		拔 落		乾 燥		調 製		其 他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
四、〇〇〇	〇、五〇〇	〇、三〇〇	〇、三〇〇	〇、三〇〇	二、〇〇〇	〇、九〇〇	一、〇〇〇	〇、三〇〇	一、〇〇〇	〇、三〇〇	一、五〇〇	〇、〇〇〇	一、〇〇〇	〇、〇〇〇
二、〇〇〇	〇、三〇〇	〇、三〇〇	〇、三〇〇	〇、三〇〇	一、〇〇〇	〇、九〇〇	一、〇〇〇	〇、三〇〇	一、〇〇〇	〇、三〇〇	一、五〇〇	〇、〇〇〇	一、〇〇〇	〇、〇〇〇
一、〇〇〇	〇、三〇〇	〇、三〇〇	〇、三〇〇	〇、三〇〇	一、〇〇〇	〇、九〇〇	一、〇〇〇	〇、三〇〇	一、〇〇〇	〇、三〇〇	一、五〇〇	〇、〇〇〇	一、〇〇〇	〇、〇〇〇

第三項

田中源地君稻作、耕種梗概(段當五石三斗二合二勺)

- 一、稻の品種及系統 大正元年、農事試験場より、晚稻西の宮種の配布を受け、爾後自家にて栽培し來りたる者なり。
- 二、種子の選擇 稻の黄熟を待ちて實入充分なる穂を選び、刈取り屋下に下げ、乾燥を待ちて選別したり。
- 三、浸種、日數及方法 日數は五日間なり、而して方法は直徑三尺位の桶に浸

- し、朝夕二回水を換へ、上下攪拌し、吸水を平等ならしめたり。
- 四、苗代地の耕耨時期並に方法及整地方法 二月上旬、平耨に耕し、五月二十四日塊返しをなし、翌日灌水をなし、荒塊搔きをなす、午後に至り二回縦横に搔き均し、其の翌日に至り、畦幅四尺、溝一尺一寸に區劃したり、而して荒搔及搔均の時は落水して小水にせり。
- 五、苗代肥料の名稱、數量及施肥期及其方法

肥料名	數量一畝分	追肥時	期	方	法
下 肥	二七	追肥は六月三十日	三	荒塊搔の時に施す	
藁 灰	一三	二	三	床押の時に施す	
過 磷 酸 石 灰	一	二	三	荒塊搔の時に施す	

- 六、苗代播種月日、播種量、播種方法 播種月日は五月廿七日、播種量は一坪に付四合、方法は揚播とし、後灌水す。
- 七、苗代用水の灌溉、除草、病蟲害、豫防驅除 二日間は水深三寸位にし、三日目

に落し、日光に浴せしめ、爾後二寸位に浅くし、隔日又は三日目に、午後落水して温度を興へたり。

除草は二回行ふ、七月七日と六月二十三日なり。

病害の豫防驅除は別に行はず、害虫驅除としては、苗の三四寸に伸びたる頃、一畝歩に對し、石油三合を二回に散布し、深水して浮塵子を驅除す、螟蟲卵は四回採取せり、發生は極めて少かりき。

八、本田の土質、耕土の深さ、心土の状態 土質は粘質壤土にして、耕土の深さは六寸、心土の状態は、赤褐色の薄き方にして、水の滲透力強く、爲に灌漑するに多少困難なり、夫れ故に、稻の根は、能く侵入し得るなり

九、前作物及整地の方法 前作物は小麦にして、麥を刈取り、塊返をなし、直に灌水し、荒塊搔を三日目に行ひ、二日を隔て、中耨をなし、移植の日に代搔をなす。

十、插秧の月日等 插秧は七月二日にして、其距離は八寸に八寸なり、一坪の

株数は五十六株、一株の苗数は二本乃至三本なり

十一、肥料其他

肥料名	總量	元肥	追肥	單價	總額
菜種油粕	二〇 <small>貫</small>	一 <small>貫</small>	二〇 <small>貫</small>		四、七二〇
下肥	一〇〇	一〇〇			一、二二〇
過磷酸石灰	一〇〇	一〇〇			一、一〇〇
干鱈	七	七			一、九五〇
計	一三七	一一七	二〇		八、九九〇

元肥は、荒塊搔の際に施用し、追肥は三番除草の際施用す

十二、除草の時期 一番除草、即ち雁爪打は七月十七日、二番除草は手を以て

八月三日に、三番除草は同じく八月十五日に、四番除草は八月二十三日に五番除草は九月二日に施行したり。

十三、用水の灌排 植付てより一日置きに水車にて濠より踏上げ、除草及施肥の際は排水す

十四、稗拔其他 稗拔は落水して一回行ひたり、病害の驅除、豫防は別に行はず、浮塵子は一段歩に石油九合を散布し、驅除し、螟蟲は郡に於て指定せられたる日に、螟卵採取を行ふ。

十五、耕種方法 は、普通の方法と相違なし、唯改善する所は、苗代を共同とし、共同採種田の種子を能く選別し、薄蒔を行ひ、害虫の驅除豫防、其宜しきを得たる結果なりと信ず。

十六、本田の所在地等 本庄村鹿の子字、一本杉、四の角四五八の第一

一、田壹段七畝〇四歩。

十七、本田の公定地價等 公定地價は五十九圓にして、等級は九等、賣買價額は三百圓なり。

十八、耕作者田中氏は、特に進取的と云ふに非ざるも、事に當り頗る熱心にして、毎年段當十三俵位は實收する田地少からず、肥料の如きは人造的に非ざる有機物なる魚油、油粕の如きものを使用す、氏は名の人よりは、實の人なり。

りと村民は謂ふのである。

十九、稻作一段歩の收支概算 一段歩收支計算

収入之部

種類	種類	數量	單價	價格	摘要
玄米	米	五、三一二	〇、一一二	五九、四九四	一俵三圓八十錢なり
屑米	米	〇、〇四〇	〇、〇五〇	〇、二〇〇	賣るとして計算せり
藁	穀	九〇	〇、〇二〇	一、八〇〇	同
計	穀	五、〇〇〇	〇、〇〇五	六一、七四四	同

支出之部

種別	金額	摘要
種子	〇、四八〇	種子三本代 一升十六錢
肥料	八、九九〇	

人夫賃	一〇、二〇〇	男一人……五十錢より六十錢 女一人……二十五錢より三十錢 馬……一圓
農具損料	二、五〇〇	
公租其他	四、二〇八	地租二圓七十三錢五厘、縣稅八十六錢五厘、水利組合費一錢二厘二毛、農會費十五錢
協議費		
雜費		
計	二六、三七八	

二十、稻作一段歩所要人夫及賃銀

米作一段歩に對する人夫賃

區別	人員	單價	總額	摘要
苗代整地其他	男 〇、五	〇、六〇〇	〇、三〇〇	
本田畦畔塗塊返シ	男 〇、五	〇、六〇〇	〇、三〇〇	
荒搔	男 〇、二	〇、六〇〇	〇、一二〇	
中勸	男 〇、五	〇、六〇〇	〇、三〇〇	
代搔	男 一、〇	〇、六〇〇	〇、六〇〇	
苗拔	女 三、〇	〇、三〇〇	〇、九〇〇	
除草	女 三、〇	〇、三〇〇	〇、九〇〇	
計			一、九〇〇	

區別	人員	單價	總額	摘要
施肥	男 二、〇	〇、六〇〇	一、二〇〇	
除積	女 二、〇	〇、二五〇	〇、五〇〇	
刈取	男 二、〇	〇、五〇〇	一、〇〇〇	
撥落	男 一、五	〇、九〇〇	一、三五〇	
乾燥	女 二、〇	〇、四〇〇	〇、八〇〇	
製他	女 一、〇	〇、八五〇	〇、八五〇	
計			一、〇、二〇〇	

第四項

永淵清次郎君、稻作耕種梗概(段當五石三斗一升七合)

- 一、品種及系統 西ノ宮種にして、昨年農事試驗場より配布を受けたるものなり。
- 二、種子の選擇 試驗場より配布を受けし者を、直接使用したり。
- 三、浸種の日數及方法 浸種日數は五日間、桶浸にして毎日換水し、且一回宛攪拌したり。

**四、苗代の整地** 第一回は十二月十二日耕起し、第二回は一月五日再耕、第三回は五月十日耕耨、第四回は第三回耕起後灌水して、所要の下肥を施し、後馬耙にて縦横八回耙撈をなす、其後排水して雑草、稻株等を拾ひ取り、所要の磷酸肥料を施し、棒を以て並を直し、翌日一日間干付く、其翌日四尺の畦に一尺の溝の短冊形の畦作をなし、畦の高さ三寸位に至らしむ、而して充分能く並均をなす、而して其翌日一寸灌水し、床面を浸し、後排水し、直に蒔付をなし、播種を終りて後、藁灰及泥土堆積して風化せるものと混和物を、種子の見えざる位の度に施用す、而して總ての作業終れば直に灌水す。

**五、苗代肥料** 肥料は一畝歩に對し、下肥二斗、精過磷酸石灰、四百匁、藁灰六斗、泥土二斗とす。

**六、苗代播種月日其他** 五月十五日播種をなし、坪二合蒔にして、撒播をなす。

**七、苗代用水灌排其他** 蒔付後四日位灌水し、五日目に午前十時より、午後四時位迄の間、日干をなし、後灌水し、以後一日置に斯の如く繰返す、蒔付後二十

日を經過せば、常に淺く灌水するものとす。

除草は二回なしたり、第一回は苗の二寸位伸びたる頃、第二回は植付前になしたり。

病蟲害は未發に防止するに努む。

**八、本田の土質、耕土の深及、心土の状態** 壤土にして、耕土の深さ六寸、心土は表土と同質なる粘土にして、第四紀統新層よりなれり。

**九、前作物及整地の方法** 前作物なく、冬期休閑せしめし者なり。

整地、第一回十二月十日耕起し、第二回一月十五日再耕、第三回六月二十日、第四回は六月二十七日、第五回は六月二十九日耕耨せり、而して第一回より第三回に至る、耕耘は鋤を以てし、第三回後灌水して馬耙を以てしたり。

**十、插秧其他** 插秧は六月二十九日になしたり、距離は一尺に三寸、而して一坪百株にして、一株一粒株植をなしたり。

**十一、肥料其他(但一段歩當り)**



肥料名	元肥			二番肥			三番肥			單價	總價額
	荷	貫	匁	匁	匁	匁	匁	匁	匁		
蘆泥土	三〇〇										一、五〇〇
堆肥	一六〇										一、四八〇
綠肥大豆	八〇										三、六五〇
菜種油粕	二貫五								百斤四、〇〇〇		〇、六〇〇
骨粉	八貫								十貫二、〇〇〇		一、九二〇
大豆粕				一〇					七貫五百二匁		二、〇〇〇
大過磷酸石灰				二、五〇〇					十貫一、〇〇〇		〇、二七〇
木灰				一六、〇〇〇					十貫〇、二〇〇		〇、二五〇
藁灰				一〇、〇〇〇					十貫〇、二〇〇		〇、一〇〇
硫酸加里				一五、〇〇〇					十貫四、〇〇〇		六、〇〇〇
鹽化滿									一貫〇、六〇〇		〇、九〇〇
合計									一、五〇〇		一八、六七〇

元肥は第五回耕耙前に施用し、二番肥は三番除草前、三番肥は三番除草後施用す。

十二、除草其他 除草は植付後二週間目雁爪打、第二回は其後一週間にして排水して行ひ、二日間干付をなし、第三回除草は第二回除草後十日目に排水して行ひ、除草後五六日間干付をなす、第四回は第三回後十五日を経過して施行す。

稗取は前後二回とす。

十三、用水灌排 除草後日干の外常に淺く灌水し、出穂後二週間にして全く排水をなすものとす。

十四、螟卵の採取をなす而已にして、他に病害蟲を認めぬ。

十五、特に記すべきことなし。

十六、本田の所在地 高木瀬村大字長瀬、字小里三本松、三百九十五番地  
一、土地臺帳面積、一段二畝四歩。

十七、本田の公定地價 は、七十圓四十七錢にして、等級は九等なり、賣買價額は段當四百圓なり。

十八、耕作者の農業状態の大要 耕作者は三町歩の水田を耕作し居れり、而して年々中稻(白紅屋)晚稻(白神力)晚白笹を各二段餘宛採種田として栽培し、各地よりの需に應ぜり、即ち氏は本縣唯一の篤農家にして、昨年於ては五石懸賞に第一番に合格し、尙ほ此の外農事上に付きて、各方面より賞状等を受けり、事、擧ぐるに違なき程にて、水稻立毛の頃に至らば、來觀者毎日五六人宛の多きに達す、又稻作に對しては殆んど狂的にして、或は立毛期に於ける、異品種、混穂の拔取、害虫驅除、其他管理に至つては、充分周到なる手段を施せり、我農界に於ける一偉人たり。

十九、稻作一段歩收支概算米作一段歩收支計算

收入之部

種別	數量	單價	價格	摘要
直米	五、三一七五 <sup>石</sup>	二石一二、五〇〇	六六、四六九 <sup>円</sup>	實算
屑米	〇、〇五〇〇	二升 〇、〇五〇	〇、二五〇	同

種別	金額	摘要
糞計	三〇〇、貫一貫	〇、〇〇五
穀計	四〇貫十貫	〇、二〇〇
		一、五〇〇
		〇、八〇〇
		六八、〇一九
		坪當り改算 見積

支出之部

種別	金額	摘要
種子代	〇、三〇〇 <sup>円</sup>	種子二升代 一升十五錢
肥料代	一八、六七〇	
人夫賃	一三、五六〇	
農具損料	五、〇八五	
公租其他		地租三圓三十一錢五厘、縣稅一圓三錢、村費六十錢、農會費五錢
協議費		
雜費		
合計	三十七、六一五	

二十、稻作一段歩所要人夫及賃銀

區別	人員	單價	總額	摘要
苗代	一、六〇	〇、六〇〇	〇、九六〇	
本田畦塗	〇、五〇	〇、六〇〇	〇、三〇〇	
塊起	二、〇〇	〇、六〇〇	一、二〇〇	
塊返し	〇、二〇	〇、六〇〇	〇、一〇〇	
荒搔	〇、二〇	〇、六〇〇	〇、一〇〇	
中勸	〇、二〇	〇、六〇〇	〇、一〇〇	
代搔	〇、二〇	〇、六〇〇	〇、一〇〇	
苗取及移	二、二〇	〇、六〇〇	一、三二〇	
除草	四、〇〇	〇、六〇〇	二、四〇〇	
施肥	一、五〇	〇、六〇〇	〇、九〇〇	
管理	一、〇〇	〇、六〇〇	〇、六〇〇	
害蟲驅除	一、〇〇	〇、六〇〇	〇、六〇〇	
刈取	二、〇〇	〇、六〇〇	一、二〇〇	
撥落	二、〇〇	〇、六〇〇	一、二〇〇	
乾燥	一、〇〇	〇、六〇〇	〇、六〇〇	

調製	其他	合計
三、〇〇	一、八〇〇	一、一〇〇
三、〇〇	一、八〇〇	一、一〇〇

第五項 中副青年會稻作耕種梗概(段當五石五斗二升六合五勺)

一、稻の品種及系統 品種は晚稻、西の宮種なり。

系統、本品種の當久保田村に移入栽培せらるゝに至りたるは今より(大正三年)十七年前にして福岡縣、柳河地方より嘉瀬村字萩野の人、古賀勘三氏移入耕作せしを久保田村字中副の人、古賀一次氏、勘三氏より種子一升餘分與せられ、耕作せしより廣がれり、而して熊本縣にて栽培せらるゝ、白笹(晚白笹とも云へり)と同種異名の品種ならんと謂へり。

二、種子の撰擇 耕作に使用した種子の撰擇は、數年間、毎年收穫期前拔穂をなし、之を採種用として、耕作したる者にして、播種に先ち唐箕選を行ひ、五月四日比重一、一二の鹽水を以て選別し、後ち清水にて、鹽分を除去せしめたり。

**三、浸種日數及其方法** 清水にて洗ひたる種子は、桶浸として五月四日より同月九日迄六日間浸漬し、毎朝一回清水を入れ換へ、同時に上下攪拌して溫度を平均し、發芽を均一にせり。

**四、苗代地の耕耨時期並に方法及整地の方法** 苗代田は耕耘の關係より毎年同一の地を供用し來りたり、昨年晚稻收穫後、大正三年一月上、中旬に至り、跳切及耨割を行ひ、二月上旬之を耨込、並に耨上をなし、五月六日塊返をなし、一日乾燥せしめ翌日灌水し、馬糞を以て土塊を碎くと同時に、田面を均一にし、翌日落水し、再び馬糞を施し、田面を平均せしめ、而して四尺に一尺の溝を造り、短冊苗床となし、後、溝に水を注ぎ、板片にて床面を均一にし、落水して、一日間干し播種す。

**五、苗代肥料の名稱、數量及施肥期と其の方法(一畝歩)**

下肥、二斗五升 過磷酸石灰、一貫二百五十匁 糞灰、九斗

而して、下肥は、五月七日塊返後、過磷酸石灰は、五月八日、第二回馬糞前に、糞灰

は五月十日、播種後に、各全量を一回に施し、追肥を施用せず。

**六、苗代播種月日、播種量、播種の方法** 浸漬したる種子は五月九日、種子上げをなし、一夜水を切り、翌十日、一坪當二合五勺播種せり、而して播種は揚蒔法に依り空蒔とす。

**七、苗代用水の灌排、除草、病蟲害の豫防、驅除** 播種後其翌朝灌水し、以後三十日間は、毎日、日中二時間餘排水し、淺水とし、而して其後は三日間、毎日中、落水せり、播種後三十日餘にして、第一回雜草及馬鹿苗、除去をなし、植付前、尙、一回之を行へり。

害蟲驅除として、播種後十五日位より毎日一回螟蟲卵採集を行ひ、六月二十日畝當り、殺蟲油一合を注ぎ、浮塵子驅除を行へり。

**八、本田の土質、耕土の深及心土の状態** 土質は第四紀統新層粘土質にして心土は赤色、重粘土質にして耕土の深さ四寸五分あり。

**九、前作物及整地の方法** 耕作供用田は、西瓜栽培田にして、六月十日塊返し

を行ひ、三日間乾燥し、後ち灌水して六月十五日第一回馬糞(荒搔)同二十日第二回馬糞(二番搔)同二十六日第三回馬糞(三番搔)を行ひ、七月一日植代搔をなしたり。

十、插秧の月日、插秧の距離、一坪の株數、一株の苗數 七月一日、一坪五十三株當り、一株の苗數、二本植として挿秧せり。

十一、施用したる肥料の名稱、數量、施肥期及其方法(一段歩)

肥料名	總量	追肥			單價	總額
		第一回	第二回	第三回		
銚粉	一六、〇〇〇				十貫三、七五〇	六、〇〇〇
骨粉	一〇、〇〇〇				同 二、五〇〇	二、五〇〇
硫酸加里	四、〇〇〇				同 四、六〇〇	一、八四〇
配合肥料五號	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇			一、二、四〇〇	二、四〇〇
計						一三、七五〇

元肥中、銚粉は細く破碎し、塊返前に骨粉及硫酸加里は全量を、植代前に施し、

配合肥料(五號)は、追肥として八月二十七日に全量を一回に施用せり。

十二、除草其他 第一回除草(雁爪打)を七月十五日に、第二回除草は、七月二十五日に、第三回除草は、八月十一日に、第四回除草は、八月二十八日に行へり、而して稗拔取は毎除草の際注意し、除去するに努めたるも尙八月十五日、九月十日の二回に特に行へり。

十三、用水の灌排 灌水は植付後二番除草迄は淺水とし、以後三日目毎に、半日間干し、灌漑し、穂揃後、十五日頃落水せり。

十四、病虫害の豫防驅除 植付後螟蟲卵採集を五回行ひ、尙、浮塵子驅除として殺蟲油一段歩一升當り注ぎ驅除一回行へり。

十五、耕種上に就き、其地方、普通方法と比較し、相異の點 殊更著しき改善を加へたる點なし。

十六、本田の所在地、臺帳面積 久保田村大字徳萬字金丸分三本松、四の角千四百十八番

一田、一段二畝二十一步。  
十七、本田の公定地價等級及賣買價格

公定地價 五十四圓五十八錢

賣買價格 二百八十圓

十八、耕作者、農業狀態の大要、其他參考となるべきもの  
村に於ける模範青年を養成する目的を以て、久保田村役場の後援を得、設立せられし者にして、農事の改良を計るを以て事業の主目的とせり、而して左の各項を行へり。

一、試作田經營

二、農事講話(毎月二回)

三、補習夜學

四、競作會及製作品評會

五、夜間作業(藁細工農具の製作)。

其他部落に於ける農事改良は、本會に於て主として行ひ來れり。  
十九、稻作一段歩收支概算 一段歩收支計算

收入之部

種別	數量	單價	價格	摘要
玄米	五、五二八 <sup>石</sup>	三、八〇〇 <sup>円</sup>	六六、三三六 <sup>円</sup>	一俵(三斗四升)代三圓八十錢なり
屑米	〇、〇二八	〇、〇四〇	〇、一一三	
藁	二、三〇〇 <sup>貫</sup>	十貫〇、〇八七	三、〇〇〇	
粗計			六八、四四九	

支出之部

種別	金額	摘要
種子代	〇、一八〇 <sup>円</sup>	種子一升五合 一升十二錢五厘
肥料代	一二、七七〇	
人夫賃	一二、五〇〇	
農具損料	一、〇〇〇	
公租其他	四、四八五	地租二圓四十五錢六厘、縣稅七十九錢五厘、村費九十六錢五厘、農會費十六錢

附錄

協議費	一、〇〇〇
雜費	三、九三五
合計	四、九三五

二十、稻作一段歩所要の人夫及賃銀 米作一段歩に對する人夫賃銀

區別	人員	單價	總額	摘要
苗代整地其他一切	一、〇〇	〇、五〇	〇、五〇	
本田畔塗	一、〇〇	〇、五〇	〇、五〇	
塊起	二、〇〇	〇、七〇	一、四〇	
塊返	〇、〇〇	〇、七〇	〇、二〇	
荒搔	〇、〇〇	〇、七〇	〇、一四〇	一日十時間
中耨	〇、〇〇	〇、七〇	〇、一四〇	
代搔	〇、〇〇	〇、七〇	〇、二一〇	
苗拔及移	一、〇〇	〇、九〇	〇、九〇	
除草	四、〇〇	〇、六〇	二、四〇〇	
施肥	五、〇〇	〇、六〇	三、〇〇〇	四回

管 理	除 積	刈 取	拔 落	乾 燥	調 製	其 他	計
一、〇〇	〇、六〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	一、〇〇
一、五〇	〇、四〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	一、五〇
二、〇〇	〇、五〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	二、〇〇
二、〇〇	〇、五〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	二、〇〇
〇、五〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、五〇
二、一〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	二、一〇
							二十人一時間

二十一、大正三年度懸賞會合格稻田調査表

項目調査	出品者	西ノ宮	西ノ宮	西ノ宮	西ノ宮	西ノ宮
稲品種	佐賀郡東與賀村	佐賀郡久保田村	佐賀郡中川副村	佐賀郡高木瀬村	佐賀郡本庄村	田中源地
出品稲田面積	高園岩吉	中副青年會	山田伊三郎	永淵清次郎	田中源地	田中源地
收量調査面積	一、四畝二十步九合	一、四畝九步一合	一、反十三步八合餘	一、反二十二步九合	一、反九畝四步二合	一、反九畝四步二合
土質	合九畝一、反二畝十一步三合	一、反二畝二步二合	一、反十步	九畝十六步六合六分	六畝	六畝
耕地ノ深サ	四寸五分	四寸五分	五寸	六寸	四寸五分	四寸五分
土地等級	乙八等	九等	八等	九等	九等	九等

附 録





備考

- 一、出品稻田面積ニ對シ、收量調査面積ノ少ナキハ、選拔出品ノ爲メ郡村水稻品評會ニ於テ刈試ヲ行フタル面積ヲ差引キタルメナリ。
- 二、一株稻穗數及一穗ノ長サハ廿株ヲ調査シ平均シタルモノナリ
- 三、一反歩施用肥料金額中ニハ、自家ニテ生産シタル糞、灰、青刈大豆、堆肥、泥土等ヲ算入セズ。
- 四、鹽化滿俺ハ便宜肥料欄ニ記載セリ。
- 五、肥料成分量ハ普通肥料分析表ニ依リ計算シタルモノニシテ、施用肥料ハ含有成分アンモニア性窒素五、%可溶磷酸一、%硫酸加里ハ同可溶加里四七、%含有ノモノナリ。

第四章 肥料成分

各肥料十貫匁中に含有する成分は左の如し

肥料分析表 (原料十貫匁に付)

品名	窒素	磷	酸	加里
人糞尿	五七 <sub>分</sub>		一三 <sub>分</sub>	二七 <sub>分</sub>
人糞	一〇四		三六	三四
人尿	五〇		五	二一
毛髮	七一〇			
堆肥(新鮮)	三九		一八	四五
同(中熟)	五〇		二六	六三
同(完熟)	五八		三〇	五〇
新鮮厩肥(馬)	五八		二八	五三
同(牛)	三四		一六	四六

附  
録

金	乾	乾	魚	同	魚	魚	鯡	鯡	鱈	鱈	蠶	蠶	蠶	同	蠶	骨
龜	小	田			魚	骨	榨	干	榨	干			蛹			
					類								榨		蛹	
					食								(乾)		(新)	
					用											
					滓											
					(乾同新頭及骨)											
子	蝦	螺	鱗	鱗	粉	粕	魚	粕	魚	糞	渣	粕				炭

三〇一	九九〇	一七〇	五九〇	六二〇	二八〇	四二〇	八三〇	六六〇	九七〇	七五〇	一四四〇	二七〇	一〇〇〇	七四七〇	一九〇	七〇
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	------	------	-----	----

五六	三五〇	二四〇	一六六〇	七六〇	三四〇	一〇四〇	五六〇	二三〇	四〇〇	三七〇	一五〇	二九	一四〇	九八〇	二〇	二九〇
----	-----	-----	------	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	----	-----

六五

五〇	一〇	八〇					七〇	六〇	五〇	七〇	一一〇	一三〇	五〇	四五〇	一〇	一〇
----	----	----	--	--	--	--	----	----	----	----	-----	-----	----	-----	----	----

骨	肉	蒸	獸	血	粉	鶯	鳩	同	鷄	日	牛	牛	馬	馬	馬	同
					末					干						
					骨					の						
					骨					兔						
					獸					糞						
										(乾)						
										(新)						
										(乾)						
										(新)						
										糞						
										尿						
										糞						
										尿						
										(乾)						
										(新)						
										(豕)						
灰	粉	粉	粉	粉	屍					糞						

日本一の稻作法

一六五	四〇八	三八〇	一八〇	六五〇	一〇〇	一七六	三八〇	一六三	一九二	七〇	五八	一五	二三	五四	四五
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----

三五四〇	六九	二四二〇	二三二〇	一二〇	一三九〇	一四〇	一七八	二八三	一五四	九二	少量	二八	少量	少量	二八	一九
------	----	------	------	-----	------	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----

六四

三〇九	二七〇	三〇〇	六二〇	一〇〇	一〇七	八五	二四〇	二〇	四〇	四〇	六〇
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	----	----	----	----

粟	陸	水	玉	大	小	棉	大	小	大	蕎	米	麥	生	乾	モ	乾
	稻	稻	蜀	麥	麥				麥	麥		麥	麥	麥	ヤ	燥
稿	稿	稿	黍	稿	稿				の		芽	芽	芽	の	シ	餡
稈	稈	稈	莖	稈	稈	實	豆	麩	麩	皮	糠	粕	芽	芽	根	粕

九一	七九	六三	四八	六四	四八	三六五	五三四	二二四	一七六	二七二	二〇八	七八	一〇四	一六〇	三六八	六五七
----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----

二九	一〇	一一	三八	一九	二二	一〇五	一〇四	二六九	九一	一〇七	三七八	三五	五三	九三	一八二	一三〇
----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	----	-----	-----	----	----	----	-----	-----

二八	八五	八五	一六四	一〇七	六三	一〇九	一二六	一五三	八三	九七	一四〇	四	二五	四四	二〇八	一
----	----	----	-----	-----	----	-----	-----	-----	----	----	-----	---	----	----	-----	---

瓜	新	乾	新	同	醬	同	藍	菜	桐	牛	大	同	櫛	乾	棉	茶
哇	鮮	燥	鮮		油			種	實	莊	豆			麻	實	實
薯	豆	燒	酒	(乾)	粕(新)	(乾)	粕(新)	油	油	大豆		(豆子玉)	粕(櫛玉)	油	油	油
の	腐	酎	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕
織	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕
維	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕

一三	六八	六二〇	二八九	四一三	二〇二	二二六	六三	五〇五	二五六	六六〇	七六七	四二八	一一六	五八六	六二一	二一三
----	----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

三	一二	五〇	二七	三五	二三	一六四	九二	二〇〇	八五	一三〇	一一〇	一九〇	四二	三二七	三〇五	五四
---	----	----	----	----	----	-----	----	-----	----	-----	-----	-----	----	-----	-----	----

二七	一五	一七	三三	八八	二一七	四七	一三〇	五二	二五〇	一五八	一一一	七七	一四五	一五八	一九九	一
----	----	----	----	----	-----	----	-----	----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	---





佐賀の塵泥土	米泔水	風呂水	庖厨の下	厨下の溝	掃溜の芥	トーマス燐肥	沈澱燐酸石灰	重過燐酸石灰	石炭の煤	薪木の煤	石炭	藁灰
二三	三八	〇、五	二	六〇	一八	一五〇	一五〇	二四〇	一三〇	一三〇	二四〇	二二〇
三七	三〇	〇、四	一	四〇	四二	一七九	一九五〇	四四九	四〇〇	四〇〇	二〇〇	二二〇
八	一二	〇、一	〇、三	一〇	二九	一〇	一〇	一〇	二四〇	二〇〇	四五〇	四五〇

# 附 録 終

大正四年八月廿二日印刷  
 大正四年八月廿八日發行

六石  
 實收 日本一の稻作法  
 定價金八拾錢

著 者 戶 上 信 次

發 行 者 兼 鹿 島 長 次 郎

印 刷 所 興 文 社 工 場



## 發 行 所

東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地  
 振替貯金口座東京一八四四番

興 文 社

農學博士澤村眞先生合著  
駒井養蜂園主駒井春吉先生合著

農家副業全書

菊判美裝函入全一冊 定價金壹圓六拾錢  
紙數六百餘頁 送料金拾貳錢

農村繁榮策としての副業の奨励は、衆議院の議題に上つたのである、當業者諸君よ!! 普通農業の外に副業を盛ならしむる事は邦家の爲に急務にはあるまいか? 本書は本邦唯一の副業案内書にして、幾多有利なる副業に其方法を解り易く極めて實際的に百數十の副業を挿入して講述したるものであるから其地方々々の状況に應じ適當の副業を選び行ふたならば、巨萬の富を積むことも敢て難事ではあるまい。斯業者諸君速に一本を座右にせられれば自家の富裕を大ならしめ、大には邦家の富力を増進せしむる事に努力せられんことを。

農學士恩田鐵彌先生校訂  
農學士片田豐太郎先生校訂  
福岡縣鞍手郡立農學校校長香月喜六先生編著

實蔬菜園藝法

菊判上製函入全一冊 特價金壹圓參拾錢  
紙數四百六十餘頁 送料金拾貳錢

本書は蔬菜の性状、來歴料理、化學的成分、衛生的効能、風土、品種等より整地栽培の技術、收穫、調製、貯藏、軟白、促成の諸法に至るまで、苟も蔬菜に關する事項は、悉く是を網羅し一讀何人にも了解し得らるる如く簡明に説述せり、殊に蔬菜の實用的料理法數十種を詳述し其衛生的効能を舉示し、菜食の有利なるを鼓吹したる等一般の家庭にも欠くべからざるものなり。斯くして本書は蔬菜園藝法に一大進歩を企圖せしのみならず農家の爲に菜食の有効を説きたる唯一の参考書なり。

最新刊の理想的大辭書

絶代名著

芳賀剛太郎著

漢和大辭書

縮刷漢和大辭書

本書著者 漢文學の大家にして字學の造詣最深にして知人間の往來をも廢し一身を斯業に捧げ盡して漸く完成す新鑄活字を用ひ文字鮮麗字畫嚴正なり組織井然一目瞭然快感を感じしむ

本書各種 古字俗字音字國字漢音吳音慣用音等漢語和語新舊語佛語梵語支那現語等漢訓國訓を分載し又正用誤用を指摘す毫の三體を挿入す本字の下斯道大家撰立を詳説誤似を明辨

背皮美本箱人縦六寸八分、横四寸七分、厚三寸  
二千五百七十頁製本既成  
特價部限 金貳圓五拾錢  
定價金三圓 送料内地二十錢 鮮、臺、滿四十錢

正確無比

特色

解釋穩當 懇切を得たり其の中庸を得たり  
語類豐富 該博空前なる新種書  
模範辭書 古來諸字書の誤を悉く訂正字書中の字畫一字一句討論査覈を經て一點誤なし  
正確無類 眞に實用的にして至便比類なし

文字研究 理想的な行草書法練習用として至便也  
故事熟語 研究用として適切遠く其専門書に優れり  
實用的 日用語支那語等を包容時代の要求に應ず者荷も文筆に携はる者の日常必須は勿論

發行所 東京市日本橋區馬喰町二丁目一四番地 興文社  
定價金貳圓 送料内地十二錢 鮮、臺、滿二十錢

用途 學生學者 萬人萬家必需寶典





終